



Puzzle文集 2



# 目次

宍戸スイート・シーズン . . . . .	1
地面を見下ろし蹲る . . . . .	3
空を見上げて反り返る . . . . .	5
バイキングは苦手である . . . . .	8
美しいおっさん . . . . .	10
君の名を鳴く . . . . .	13
宍戸ノー・ファン . . . . .	14
でも、やるんだよ . . . . .	16
せいので飛び出せ . . . . .	19
団地最後の花 . . . . .	21
はれた日は会社をやすんで . . . . .	25
あえて言わないだけです . . . . .	27
モラルとゲリラ . . . . .	28
宍戸グレート・ディクテーター . . . . .	31
過去の少年 . . . . .	33
世界はこんなにも . . . . .	35
少年の子守唄 おっさんのブルーズ . . . . .	37
迷子になった覚えはない . . . . .	38
宍戸オール・アポロジーズ . . . . .	40
ありがとサンキューベリマッチ . . . . .	42
奥付	
奥付 . . . . .	48



## 宍戸スイート・シーズン

朝に一度はあがった雨だったが、再び降りはじめていた。

雨の休日も悪くない。自室に籠もってマディ・ウォーターズを聴きながら、野良猫たちの叙事詩、最高にハードボイルドな児童文学書を読み耽る。

コーヒーでも飲みたいところだ。

英語がからっきしだから、野太い声が何を言っているかは分からない。だからいい。英語が理解できてしまったら、こんな歌声をBGMに本なんて読めない。

インスタントでいいかな。

ダイニングへ向かうと、隣の居間では、細君と息子が『黒髭危機一髪』に興じていた。最新型のそれは電気仕掛けで、樽が震えるは、音が鳴るは、やたらと賑やかな玩具になっている。幼い子供にはウケがいいようだ。

「こういうゲームで、順番を守るとか、ずるしないと、社会のルールを学ぶのよ。私もパパに言われたもの、賭事で嘘付いたら殺されてもしかたがないんだって」

「どんな教育なんだ」

自室に置かれた携帯電話が震えた。俺はマグカップに熱湯を注いで、部屋へと戻った。

宍戸からのメールだった。

今朝、女に遭っちまった。

俺はすぐに状況を理解した。昔つき合っていた女のことだろう。宍戸は別れた女のマンションから町を眺めるという厄介な趣味を持っている（詳細は、既刊の「宍戸ヴィンヤス」をご参照いただきたい）。

で、やりたい放題やったわけだ。

まさか。俺は口先だけの男だ。

宍戸が日雇いの派遣アルバイトをしていた頃、彼女は一時期だけその事務をしていた。彼女自身、派遣された社員だった。物件シートに終了の判を押す。それ以外の彼女の仕事は知らない。

「私、パンクなんです。」

彼女はそう言って、職場を去っていった。

辞表を叩き付けながら言い放ったというわけではない。正確に言えば、一年間勤務しただけで契約の更新をしなかった彼女が、ささやかな送別会の中でこぼした言葉だ。テクノ好きな眼鏡社員が、自分の趣味の話ばかりするものだから嫌気が差したのだろう。

宍戸は学生時代からダラダラとバイトを続け、気づけば古株になっていた。そのため、彼女の送別会には参加させてもらうことになった。大人数の宴会は苦手な質だが、酔っぱらった社員たちを、彼女が右へ左へ受け流していく様子は、見ていて愉快でもあった。その頃から多少の好意を持っていたのだろう。

しかし、彼女に対するはじめの印象は、決して良いモノではなかった。それは、電車で揺られて事務所へ向かう途中の事だった。目の前の女が上を向いて口を開けたまま寝ていた。それが彼女だった。宍戸は吊革につかまって、ちょうど見下ろす格好になっていた。その場を外すのも失礼なように思えて、気づかぬ振りを通した。それでも、たまにその間の抜けた顔を横目にチラチラ覗いていた。

女は基本的に誰もが美人だ。美人であろうとする態度が美人だ。だから、それはとても残念な光景だった。事務所の最寄り駅に列車が到着すると、彼女は突然パッと目を覚めた。そして、恥じらう素振りもなく、列車を降りていった。

彼女はその日が初出勤だった。そのため、宍戸は事務所までそのケツを追いかける羽目になった。自分が向かうべきビルに彼女が入っていったとき、宍戸は何やら運命的なモノを感じていた。

仕事の終えた物件シートを差し出すと、彼女が判を押す。その態度はとても事務的で、全く愛想がない。「お疲れさま」の、一言でもあれば、間抜けなバイト連中から一目置かれる存在になれるだろうが、彼女はアルバイトと目を合わせることにすら拒んだ。

「私、パンクなんです。」

その言葉を聞いて、宍戸は大いに納得した。是非、次の派遣先でも同じ台詞を口にしてもらいたいものだ。そして、また次の会社も一年契約で去って行ってもらいたい。

ジョー・ストラマーの文句を踏まえて、宍戸は思う。

パンクであろうとする態度がパンクだ。

で、どうなった？

宍戸が彼女のマンションから町を見下ろす時は決まっている。雨上がりの早朝。あたりは靄に包まれている。でも、その上には澄み渡る青空、そして、富士山が突き出している。

水没した街から富士山だけが突き出しているような不思議な光景は、このマンションからでないと拝むことができなかった。

彼女と大好きな景色を見たよ。で、もう一度、口説いた。

早朝からか？

早朝だな。

うまくいったのか？

うまくいったと思うか？

どうなんだ？

彼女はパンクだぞ。

・・・どうなんだ？

## 地面を見下ろし蹲る

東京のベッドタウンを突き進む電動缶詰。学校へ運ばれる俺は、懸命に唇を突き上げながら、臭い空気を吸い込んでいる。鼓膜には爆音でTMGEの「ハイ！ チャイナ！」が撃ち付ける。脳みそは掻き乱され、気が狂いそうだ。朝から大量の冷凍大蒜パスタを食ったのはまずかった。

ハキタイネ ハイチャイナ

胸がムカムカする。まずは新鮮な空気を取り込まねばならぬ。蒸された饅頭オヤジ達から立ちこめる湯気を鼻孔に注ぎ込み続けていては、二分と保たない。身を振ろうにも、この缶詰状態では首を捻るのが精一杯だ。

無理矢理に首を回して、死んだヤツっているだろうか。首がつりそうになって、死ぬんじゃないかと思ったことはあるが、あのままついたらマジ死んだのか？ 首をつって死ぬのはいいが、首がつって死ぬヤツは同情されないだろうね。

オヤジの湯気が鼻孔を擦り、無駄な思考が遮断される。俺は限界まで首を捻り、極力湯気を吸い込まないように耐えた。嗚呼、もし、俺が象に生まれていたなら、鼻孔を自在に操って、湯気を吸い込まないで済んだのに。鼻で吊革なんか捕まったりしてさ。しかし、こんな時ぐらいいだろうよ。象に生まれたかったなんて思うの。初めてだよ、親が象でないことを恨んだのは。

車両に詰め込まれた無数の象が鼻を突き上げている。そんな妄想をしているうちに、電車は減速しはじめた。俺は饅頭オヤジにめり込んでいく。温いぜ。やがて電車は止まり、俺は慣性に従ってポヨヨンと弾けた。

ドアが開くと、シェイクされたソーダ水さながらニンゲンどもが吹き出された。さあ降りろ。やれ降りろ。饅頭オヤジも見事に波に飲まれ、ホームに押し流されていった。俺はコアラさながら手すりにしがみついて、なんとか持ちこたえる。続いて、寄せては返す波のごとく、まさに人波が押し寄せてきた。俺はとっさに気が狂いそうなビートを耳の孔から引きずり出し、イヤホンをショルダーバッグに押し込んだ。

その時、後ずさるザリガニのように、ケツを突き出した長身の女が突進してきた。ちょっと前屈みになってバッグに手を突っ込んでいた俺は、回避する術も無く、そのヒップを受け入れた。饅頭オヤジの腹のような弾力を持たない、鈍器さながらの硬質なヒップだ。しばし呼吸は停止し、喉の奥から世間のように酸っぱいトマトソースがちょっと漏れ出た。なおも長身女はヒップをグリグリと押しつけ、ついには俺のショルダーバッグに腰を下ろすような格好になった。両手は鞆の中にあるものだから、俺は弁当売り状態。肩紐が食い込んで、俺は人波の底に沈み込んでいった。

ハキタイネ ハイチャイナ

なおも鞆の中から最高のビートが漏れてくる。俺は残された力を振り絞って、人波からは上がる。女のケツが持ち上がり、そのままバックドロップでも打ち込みそうな勢いになった。

「痴漢！」

長身女のものと思われる女じみた声が響き渡り、気が遠のく。俺は再び沈んでいった。

やがて、どうにか学校の駅にたどり着いた。電車が止まると、俺は人波に逆らう気力もなく、ボロ雑巾のようになってホームに投げ出された。アルマーニが、フェラガモが、コンバースが、アキレスが、俺を踏みつけ、人波は去っていった。

脇腹を押さえてうずくまっていると、さっきの叫び声とは二オクターブほど低い、男じみた声が降ってきた。

「ちょっとアンタ、立ちなさいよ」

続いて、その声は再び二オクターブ高くなる。

「あ、駅員さん。ちょっと来てください。この人痴漢なんです」

まったく、勝手なこと言ってくれる。未成年に冤罪で牢獄行きはないだろうが、花も恥じらう男子校生だぞ。

俺は起き上がる気にも慣れず、プラットホームに寝そべったまま、女に視線を滑らせた。二等辺三角形に開かれた足、胸元で組まれた腕。その顔は厚塗りの唇が際立ち、眉間には深く皺が刻まれている。

「駅員さん。このヒトです」

女の横には気の弱そうな駅員が佇んでいた。顔には極太マッキーで「面倒臭いです」と書かれている。俺だってそうだ。

「キミ学生さん？」

でなきゃ、学ランなんて着てないでしょう。

「この男、私のヒップ抱え込んで、持ち上げようとしたのよ。信じられないわ」

俺はとっさに反論する。

「私、この女のヒップ抱え込んで、バックドロップ決めこもうとしたのよ。信じられないわ」

女も駅員もノーリアクションだった。女にいたっては眉間の皺を更に深く刻み、後頭部まで貫通しそうな勢いだ。

ハキタイネ ハイチャイナ

俺は、我を失いはじめていた。選択肢はもう二つしかない。大量の大蒜スパゲッティを吐き出すか。女の尻を抱え込んでバックドロップを打ち込むか。

「二つしかないぞ」

俺は立ち上がって、女と向き合った。

「なんなのよ」

女の真っ赤な唇が大きく歪み、俺はを吐き気を催した。

「無理無理」

次の瞬間、俺は地面を見下ろし蹲る。

女に選択の余地はなく、俺は嘔吐した。女の絶叫を他処に、止めどなく流れ出る大量



のスパゲッティ。

全て出し切ったところで、我が盟友の登場だ。

「おい、イタリアン！ 大丈夫か？」

俺をイタリアンと呼ぶ奴のセンスになにやら勇気づけられる。

「急がねえとガッコ遅れるぞ」

「朝から大量パスタは危険です」

俺は涙を浮かべながら捨て台詞を吐き出した。そして、逃げるようにして、二段飛ばしに階段を駆け下りていった。俺の背中を長身女のヒステリックな声が追いかける。こんな時、音速を超えられない自分に不満を感じる。自動改札を突き抜けると、ブレザー集団が右に折れてゆく。冴えない学ラン集団の俺たちは反対の左方向に曲がり、しばらく走ると速度を緩めた。

「おい、待てよ」

肩に手を掛けられ、そいつを振り払えば、我が盟友だった。

「イタリアンはよかったね」

「なんなんだよ、朝から大量パスタってのは」

「なんだか知らんが、勘違い女が、俺のこと痴漢扱いしやがってよお」

「へえ。そういや、昨日、はじめてスッポン食ったよ」

「もうちょっとヒトの話聞けよ」

「マジ、時間ヤベエぞ」

俺は、真っ赤な唾を吐き出し、学校へと再び駆け出した。

## 空を見上げて反り返る

東京のベッドタウンを突き進む電動缶詰。学校へ運ばれる俺は、懸命に唇を突き上げながら、臭い空気を吸い込んでいる。鼓膜には爆音でキングブラザーズの「★★★」が撃ち付ける。脳みそは掻き乱され、気が狂いそうだ。朝から大量の冷凍大蒜パスタを食ったのはまずかった。

スベテハ メノマエニアル タタキツブシテ ハシリヌケルゼ

胸がムカムカする。まずは新鮮な空気を取り込んで気持ちを落ち着かせたい。蒸された饅頭オヤジ達から立ちこめる湯気にもイライラさせられる。身を振ろうにも、この缶詰状態では首を捻るのが精一杯だ。

無理矢理に首を回して、ねじ切るヤツっているだろうか。首がつりそうになって、死ぬんじゃないかと思ったことはあるが、あのままつったらマジ死んだのか？ 首をつつて

死ぬのはいいが、首がつって死ぬヤツは同情されないだろうね。

オヤジの湯気が鼻孔を擦り、無駄な思考が遮断される。俺は限界まで首を捻り、極力湯気を吸い込まないように耐えた。嗚呼、もし、俺がゴリラに生まれていたら、強靱な握力で湯気を放つオヤジ共の頭蓋骨を一つ一つ砕いていけるのに。コアラの握力はゴリラの倍もあるという噂があったが、そりゃないだろう。

車両に詰め込まれたコアラとゴリラが唾み合う。そんな妄想をしているうちに、電車は減速しはじめた。俺は饅頭オヤジにめり込んでいく。温いぜ。やがて電車は止まり、俺は慣性に従ってポヨヨンと弾けた。

ドアが開くと、シェイクされたソーダ水さながらニンゲンどもが吹き出された。さあ降りろ。やれ降りろ。饅頭オヤジも見事に波に飲まれ、ホームに押し流されていった。俺はコアラさながら手すりにしがみついて、なんとか持ちこたえる。続いて、寄せては返す波のごとく、まさに人波が押し寄せてきた。俺はとっさに気が狂いそうなビートを耳の孔から引きずり出し、イヤホンをショルダーバッグに押し込んだ。

その時、後ずさるザリガニのように、ケツを突き出した長身の女が突進してきた。ちょっと前屈みになってバッグに手を突っ込んでいた俺は、回避する術も無く、そのヒップを受け入れた。饅頭オヤジの腹のような弾力を持たない、鈍器さながらの硬質なヒップだ。しばし呼吸は停止し、喉の奥から世間のように酸っぱいトマトソースがちょっと漏れ出た。なおも長身女はヒップをグリグリと押しつけ、ついには俺のショルダーバッグに腰を下ろすような格好になった。両手は鞆の中にあるものだから、俺は弁当売り状態。肩紐が食い込んで、俺は人波の底に沈み込んでいった。

スベテハ メノマエニアル タタキツブシテ ハシリヌケルゼ

なおも鞆の中から最高のビートが漏れてくる。俺は残された力を振り絞って、人波からはい上がる。女のケツが持ち上がり、そのままバックドロップでも打ち込みそうな勢いになった。

「痴漢！」

長身女のものと思われる女じみた声が響き渡り、気が遠のく。俺は再び沈んでいった。

やがて、どうにか学校の駅にたどり着いた。電車が止まると、俺は人波に逆らう気力もなく、ポロ雑巾のようになってホームに投げ出された。アルマーニが、フェラガモが、コンバースが、アキレスが、俺を踏みつけ、人波は去っていった。

脇腹を押さえてうずくまっていると、さっきの叫び声とは二オクターブほど低い、男じみた声が降ってきた。

「ちょっとアンタ、立ちなさいよ」

続いて、その声は再び二オクターブ高くなる。

「あ、駅員さん。ちょっと来てください。この人痴漢なんです」

まったく、勝手なことってくれる。未成年に冤罪で牢獄行きはないだろうが、花も恥じらう男子校生だぞ。

俺は起き上がり、女に視線を向けた。その顔は厚塗りの唇が際立ち、眉間には深く皺が刻まれている。

「駅員さん。このヒトです」

女の横には気の弱そうな駅員が佇んでいた。顔には極太マッキーで「面倒臭いです」と書かれている。

「キミ学生さん？」

「でなきゃ、学ランなんて着てないでしょう」

駅員は顔を歪めた。

「この男、私のヒップ抱え込んで、持ち上げようとしたのよ。信じられないわ」

俺はとっさに反論する。

「俺、この女のヒップ抱え込んで、バックドロップを打ち込もうとしたんだよ。信じられないだろ」

女も駅員もノーリアクションだった。女にいたっては眉間の皺を更に深く刻み、後頭部まで貫通しそうな勢いだ。

スベテハ メノマエニアル タタキツブシテ ハシリヌケルゼ

俺は、我を失いはじめていた。選択肢はもう二つしかない。女の尻を抱え込んでバックドロップを打ち込むか。大量の大蒜スパゲッティを吐き出すか。

「二つしかないぞ」

俺は立ち上がって、女と向き合った。

「なんなのよ」

女が剥き出しの足を一步前に踏み出した。俺は低い姿勢で身構えた。

「無理無理」

次の瞬間、俺は空を見上げて反り返る。

女に選択の余地はなく、俺は女の背後に回り込み、脇の下から首を突っ込んでいた。そして、女の絶叫を他処に、尻を抱え上げて体を反らす。

後方へ倒れ込もうというところで、我が盟友の登場だ。

「おいおい、岩石落としか？」

ガンセキオトシ？ 雑念が割り込んだ瞬間、長身女のやたらと長い足が俺の足にからみつく。そして、俺は下敷きに倒された。

「わお、川津落としによる見事な切り返し」

朝から大量パスタは危険です。女のヒップに圧迫されてポンプアウト必至。俺はせめてもの配慮で女を突き飛ばすと、その場に大量のスパゲッティを嘔吐した。

「イタリア人にはなれねえな」

俺は涙を浮かべながら捨て台詞を吐き出した。そして、逃げるようにして、二段飛ばしに階段を駆け下りていった。俺の背中を長身女のヒステリックな声が追いかける。こんな時、音速を超えられない自分に不満を覚える。自動改札を突き抜けると、ブレザー集団が右に折れてゆく。冴えない学ラン集団の俺たちは反対の左方向に曲がり、しばらく走ると速度を緩めた。

「おい、待てよ」

肩に手を掛けられ、そいつを振り払えば、我が盟友だった。

「ガンセキオトシってなんだよ」

「知らんのか？ バックドロップの和名だ。しかし、あの女は素人じゃねえな」

「なんだか知らんが、勘違い女が、俺のこと痴漢扱いしやがってよお」

「へえ。そういや、昨日、川でスッポンが泳いでたぞ」

「もうちょっとヒトの話聞けよ」

「時間ヤベェぞ」

俺は、真っ赤な唾を吐き出し、学校へと再び駆け出した。

## バイキングは苦手である

ゴールデンウィークの平日、俺は仕事を休んで妻と食事に出かけることにした。どうせならば少々贅沢をしたいと考え、近隣のホテルに電話をかけた。

「ランチ・ビュッフェは予約が必要なんですかね？」

「バイキングでございますね。ご予約いただければ、确实にお席をご用意させていただきます。」

ぐるなびには「ビュッフェ」と書いてあったのよ。気取って言ったわけではないのよ。言い訳したくなる思いをグッと堪えて二人分の予約を入れた。そもそもビュッフェとバイキングの違いって何？

当日の朝、彼女は少しだけ浮かれた様子で弁当を包み、園バスに乗り込む息子を見送った。これより一五時まで自由時間。平日は時間制限がないとのことなので、朝食を抜く覚悟で一時に予約を入れた。久々に二人きりでの昼食だ。

言うほど地下を走らない地下鉄に乗ると、一〇分ほどで周辺エリアへのハブとなる駅に辿り着く。そこにはいくつかのホテルがあった。

駅員に予約したホテルの場所を尋ねると、一流ホテルの名称をあげ、その手前だと告げた。その通りに歩いていくと、確かにすぐ辿り着いた。階段が地下へと伸びていく、とてもホテルの入り口とは思えない構えだ。

「地下か」

思わず眩いた。事前に確認すれば知り得たことであるが、想像したような陽の当たるレストランではなかった。

階段を下っていくと、黒ベストにサロンエプロンを巻いたウェ이터たちが出迎えた。

「いらっしゃいませ」

名前を告げると、整髪料でパリッと固めた清潔感のある男が予約席に先導した。時は昼食前。俺たちの他には、マダム友達一組が食事しているだけだった。

「当店ご利用ははじめてですか？」

俺が頷くと、男は簡単にシステムの説明をはじめた。鉄板焼きステーキだけは注文が

必要とのこと、はじめに二皿を注文した。

ステーキを待ちながら、中央テーブルに並べられた食事を取りに廻る。和洋折衷。店選びが苦手な俺にとってバイキングは都合がいい。その上、ホテルバイキングとなれば高級感さえ覚える。

しかし、いざ食事がはじまると、基本的にバイキングというものが苦手である。金額相当の贅沢はさせてもらいたいが、黒ベスト集団が見守る中で好き勝手は許されない。品性をもって取り組まねばならぬだろうと、控えめに盛りつける。すると、結局物足りず、再び食い物を求めて席を立つことになるのだ。

「タッパー持ってくればよかったわ」

マダムがマダムらしいコメントをこぼし、マダムらしい笑い声が響いた。

一体、ここでタッパーという単語がどれだけ乱用されてきただろうか。レストランの隅に座って、カウンター片手に調査する自分を思い描いた。

昼時にさしかかると、一人の男が現れた。厳つい体で大きなリュックサックを背負っている。一見、この店に似つかわしくない姿であったが、出口に一番近い席をとり、こなれた様子で鉄板焼きステーキを二皿注文した。続いて、いきなりデザートコーナーから皿一杯にイチゴを盛って席に着く。その時点で、既に元を取れているのではないかという量だ。そして、文庫本を片手にイチゴを摘みはじめた。やがて、鉄板焼きステーキが届くと、文庫本を臥せて立ち上がり、皿一杯にペペロンチーノを盛りつけた。そして、席に戻ると、パスタを啜りながら肉を頬張りはじめた。

この男、できる。

控えめに盛った皿を空にしてぼんやり男を眺めていると、彼女が俺の顔を覗き込んだ。

「もっと食べれば？」

「ああ、なんかもう腹いっぱい」

「甘鯛のソテー美味しかったよ」

「そう、食べてないな」

「取ってきてあげるよ」

彼女は明らかにバイキング下手な俺を気遣っていた。

男はパスタとステーキ肉を食い終わると、再び山のようにイチゴを盛って本を読み始めた。俺はその豪快な姿に見惚れた。イチゴを摘んで文庫本を読む姿がこんなに男らしいと思えたのははじめてのことだ。くだらない冗談のようで申し訳ないが、バイキングのキングと呼ばせていただきたい。

彼女が、甘鯛のソテーと、小さくカットされたケーキを持って戻ってきた。俺は、彼女が座ると同時に立ち上がる。

「カレーでも食っちゃおうかな」

「食べる食べる」

俺は少し深みのある小さな皿を手に取り、ここになってはじめて白いご飯に挑む。湯気立つ釜からご飯を盛りつけ、すぐ隣の鍋から五種豆のカレーなるものをかけた。

テーブルでは、彼女が小さくカットされたティラミスを口に運びながら、俺の勇姿を見つめている。マダムが談笑する中、キングは黙々とイチゴを摘み、文庫本を読み耽つ

ている。

俺はカレーと冷たいウーロン茶を持って席へ戻った。同時にイチゴを平らげたキングが再び動き出した。するとどうだ、キングはカレーの前に立ち止まるではないか。俺より二回りも大きい平皿に豪快にご飯を盛り、五種豆のカレーをたっぷりとかけはじめた。嗚呼、キング。スケールは違えど、俺の選択に間違いはなかったのだ。やっぱり、パイキングの締めはカレーですよ。俺はいたく満足な気分になって、カレーにスプーンを突き立てた。

甘鯛をつつきながらカレーを口に運んでいくと、さすがに満腹になった。コーヒーを飲む余地もない。それでも、俺は満足だった。

彼女が、紅茶を飲み終えて、カップを置いた。

「そろそろ行く？」

俺はゲップを堪えながら、小さく頭を下げ、立ち上がった。

彼女が会計を済ませている間も、まだキングの食事は続いている。どうやら、カレーが最後ではないようだ。次はサラダですか。健康にも気遣わないといけないですよ。

お先に失礼します。

俺は小声で頭を下げ、店を後にした。

階段を上り、ホテル周辺をブラブラすると、すぐにフロント入り口が見つかった。陽の当たるティー・ラウンジを備えた、なかなか立派な構えだった。俺はホテルを見上げてから、腕時計を確認する。まだ、一三時前だ。彼女は息子が弁当を平らげたかどうか心配している。

「あの小さなケーキお土産にしたかったな」

「今度、タッパー持って行くか」

軽蔑の眼差しが返ってくると思えば、彼女は本当にタッパーを持っていったお義母さんのエピソードを話しはじめた。思わず吹き出し、平日の青空に響きわたった。

## 美しいおっさん

夕暮れ、壁に向かってボールを蹴っていると、壁の隣に小太りなおっさんが立ち止まった。ヨレヨレスーツにショルダーバッグを掲げ、肉に埋もれたつぶらな目で、いつまでもボールの軌道を追いかけている。

俺は気味が悪くなって、足の裏でボールを止めた。

「あんた誰？」

「未来のお前だ」

俺は顔をしかめた。

「冗談だよ。そんな露骨に嫌がることはないだろう」

嫌がったわけではない。変な事を言うおっさんが現れたから、面倒だと思っただけだ。未来の俺でも嫌だけどね。

ヨレヨレスーツの自分を想像し、身震いがした。俺はそれを振り払うように、力任せにボールを蹴っ飛ばした。ボールは壁を逸れて、おっさんの方へ飛んだ。おっさんはとっさにショルダーバッグを下ろし、胸でワントラップ。足元にワンバウンドしたボールを蹴り返してきた。

スーツから覗く白いワイシャツにボールの跡を残し、おっさんは得意げに微笑んだ。

「大したもんだろ」

ダイレクトボレーで返してきたら驚いただろうが、そう大したことはない。

「今、大したことないと思っただろ」

俺はビクリと肩を振るわせ、おっさんは再び笑んだ。

「まだ君には分からんだろうが、この歳でここまで動けたら大したもんなんだぞ」

不意に電子音が響き、おっさんは慌ててしゃがみ込んだ。そして、ショルダーバックから携帯電話を取り出し、再び立ち上がる。電話を耳にあてて背筋を伸ばすと、地面に着いたズボンの膝が白くなっていた。

「はい、丸閥商事の末吉です」

おっさんの自己紹介が響きわたる。なにが未来の俺だ。名前が全然違うじゃないか。オペラ歌手のような体格のせいか、声が随分よく通る。電話に向かって、頭を下げたり、手を振ったり、身振りも五月蠅い。二人きりの広場で、俺は気恥ずかしくなり、再びボールを蹴りはじめた。ボールが壁を当たると、おっさんは迷惑そうな表情を浮かべ、さらに声を大きくする。俺はその声をかき消すようにさらに強くボールを蹴った。

おっさんは通話を終わると、最後にもう一度携帯電話に向かってお辞儀した。続いて、少し晴れやかな顔になってこっちを向いた。

「いやあ、お陰で一つ商談がまとまりそうだよ」

「お陰？」

「今日の占い、ラッキーアイテムがサッカー小僧だったんだよね」

そういうことかい。

その朝の番組なら俺も見ていた。

「おっさん、魚座だろ」

おっさんは小さな目を懸命に見開いた。

「えっ、君も？ ひょっとして、だからボール蹴ってたの？ 本当に、サッカー小僧なのか？」

「毎日、蹴ってるよ。俺、少年団のキャプテンだから。まわりはみんなサッカーしてるし。お陰で今日のテストは一〇〇点だったのかもな」

おっさんは口元を歪めた。

「満ち足りてるヤツだなあ。もてるんだろう」

「そんなことはないよ」

俺が首を振ると、おっさんも振った。

「本当にもてないヤツは、そんな言い方しない。苦笑いして黙り込むだけだ」

おっさんは「俺がそうだったように」と付け加えた。

「ちょっと貸してみ」

おっさんは手を伸ばした。足ですくい上げてパスすると、おっさんは飛んできたボールを膝で垂直に突き上げ、リフティングをはじめた。五回も続きやしないだろうと思えば、スーツのズボンを真っ白にさせながら中空で何度もボールを蹴り続けた。そして、一四回目のキックで息を切らせ、ボールが地面に落ちた。大げさに嘆く声が響いた。

「昔は、これでも、一〇〇回、できたんだよ」

「サッカーしてたの？」

「君くらいの時に、ちょっとだけね。はじめて、リフティングが、一〇〇回できたのは、そのずっと後。息子に、サッカーボールを、買ってやったときだな。その時、一年以内に、一〇〇回、できるように、なるって、目標、立てたんだ」

おっさんは何度も息継ぎしながらそう言った。

「で、できたんだ」

「そうだよ」

「スゲーじゃん。俺、一〇〇回もできないよ」

おっさんは得意になって胸を張った。

「俺のすごさが分かってきたか」

その胸は呼吸しながら大きく上下する。

「秘訣を聞きたいだろう」

そうでもないけれど、話したそうだから頷いてみる。

「好きな子いるか？」

俺は苦笑いして黙り込んだ。

「いい反応だ。秘訣は、その子にすごいと言われる自分を思い浮かべてニヤニヤすることだ。俺の場合は、羨望の眼差しで俺を見る息子を思い浮かべていた。想像の力は意志の力の二乗に比例する。だったかな？」

「なにそれ？」

「忘れた。大して有名でもない外人の言葉だ。参考になったか？」

俺は小さく二、三度頷いた。

「それはよかった。俺もかつてのサッカー小僧だ。魚座の君には少しでも恩返ししないと」

おっさんはボールをインサイドで転がし、「邪魔したね」と手を振った。そして、俺に背を向けて去っていった。

悪いヒトではなかったみたいだ。

少しでもいいことを言ってあげればよかったかもしれない。俺は少しだけ後悔した。

例えば、

おっさん、声が綺麗だね。



## 君の名を鳴く

ヨイチョ ヨイチョ

まだ小さな君が、マンションの階段を一段ずつ、短い足を懸命に持ち上げていく。

その背中を眺めながら、俺は階段に纏わる幼い頃の記憶を思い出した。当時は一戸建ての住まいで、子供部屋はその二階にあった。そして、ダイニングと子供部屋をつなぐ階段は、あの頃の俺にとって随分と急勾配なものだった。

時折、その階段をふわりふわりと舞い降りた。炊事をする母親に気づかれないように、そっと床を蹴るのだ。反対に、その階段を転げ落ちた記憶もある。きっと、後者のような出来事があって、前者のような夢を見たのだろう。

「俺、小さいときに空を飛んだ記憶があるんだよね」

妻にはそう伝えている。

彼女もそんな言い回しが嫌いではない。子供を見るように笑って頷いた。嘘をついたつもりはない。あれが夢だったと言い切れるほど、確かな記憶としては残っていないから。

酔っばらうと、風呂の中で、用もないのに君の名を呼ぶ。迷惑な遺伝子だ。

眠りにつく前、俺の親父は布団の中で決まって自作の物語を聞かせた。それは、俺の名を呼ぶ狐の話だ。呼ぶというより、その狐の鳴き声が俺の名前なのだ。毎晩、家で晩酌する親父は、一緒に布団に入ると熱くて臭い。そんな最低な状況で聞かされた狐の話しを、俺は良く覚えている。酔っばらいが話すものだから品の良いものではない。電信柱で小便を垂れたとか。生垣に首を突っ込んだとか。今に思えば、酔っばらった親父自身の体験談だったのではなかろうかと訝る。

それでも、俺は笑っていた。絶妙な間を持って俺の名が連呼さえる度、確かに声を上げて笑った。

親父は風呂の中でも俺の名を呼んだ。俺の名を鳴いたと言うべきか。その癖は、俺が高校生になるくらいまで続いた。ウザイなんて眉間に皺を寄せた記憶があるから、間違いない。

小猿のように喜んでいた息子が、いつしかウザイと一蹴する。不憫なもんだと他人事のように思いつつ、俺もいつしか同じ目に遭うのだろうと、思わず笑みがこぼれた。子供の成長が、いつか親父の期待を裏切る。それは喜ばしいことのようにも思えた。

大学生くらいになると、たまには感謝の言葉を口にするようになる。すると、親父は、戸惑いか、本心か、素っ気なく応えるのだった。

「自分の子供に返してやれ」

あまり小言を言う親父ではなかった。よく言えば放任、悪く言えば無責任。自分が親になってみれば、それは半々だったのではないかと思う。

そんな親父でも、幼い俺に一つ禁じたことがあった。

近所に目立って立派なお屋敷が立っており、そこには俺よりもいくつか年下の女の子が住んでいた。ある日、友人と二人でその家を訪ねたことがあった。普段から親しくしていた女の子ではない。おそらくその友人は仲が良かったのだろう。俺は連れられていったという体だ。どんな子だったか、ほとんど記憶していない。笑顔の可愛い子だったが、子供の笑顔など大抵みんな可愛い。

そのことを話すと、親父は眉間に深い皺を寄せた。

「二度と遊びに行ってはいけないよ」

それが何故なのか、尋ねることはなかった。いつだって陽気な親父が、唯一禁じたことだった。理由を尋ねる必要もないように思われた。絶対的に守るべきことなのだと、子供なりに理解した。

幼い頃の記憶は、夢の中のようにあやふやだ。

一〇代に入る手前、一度、引っ越しをした。

ふわりと舞い降りた階段、俺の名を鳴く狐、遊んではいけない女の子、それらの記憶は、どれも遠い街から連れてきた僅かな断片。俺は勝手に、あれは夢だった、あれは現実だったと分類している。全て親父の作り話だった可能性だって、否定できない。

それらをつないで一つの物語にできないかと考えている。登場するのは、一匹の狐と女の子、そして、主人公の男の子。記憶を正確に辿る必要はないだろう。男の子は俺ではない。俺が語る物語の主人公は君だ。

そして、懸命に階段を上る君が、もう少し大きくなった時、俺は酒臭い体で布団に潜り、君に語りはじめる。もちろん、狐は君の名を鳴く。きっと、あまり品のいい話にはならないだろう。

ケケケと笑い声をあげながら、君はいつしか眠ってしまう。曖昧な記憶としてしか残らない。そんな物語。

そして、いつしか女の子は言うんだ。

「もう遊びに来ては行けないよ」

物語は終わらない。

次は君の番だから。

矢戸ノー・ファン

家族で過ごすよく晴れた休日。喫茶店でドーナツを囓っていると、突然、細君がカメラのシャッターを切った。幼い息子が、液晶画面に映し出された俺を見せろとせがむ。二人で携帯電話を覗き込みながら、彼女は笑い出した。

「つまらなそうな顔してるねえ」

首を伸ばすと彼女は画面をこちらに向けた。俺はその画像に驚愕した。こんなにもつまらなそうな顔をしていたのか。よく晴れた休日だ。なにより愛しい家族との時間だ。これが気を抜いたデフォルトの俺なのだ。

つまらないから酒でも呑みに行こうぜ。

妙なタイミングで宍戸からのメールが届いた。

家族でドーナツ食ってるときに何というメールだ。とはいえ、数少ない学生時代からの友人に無視はできない。少ないどころか、最近、宍戸以外に連絡をくれる他人がいない。

あいつはバイトの金が入ると、俺に連絡を寄越し、行きつけの居酒屋に誘う。便宜上、酒を呑みに行こうと言うが、実際、あいつは酒を呑まない。恵比寿顔の店長を拝みながら牛筋煮込みをつつただけだ。

あいつと前回呑みに行ってからもう一月が経ったことになる。時の速さに呆れつつ、とりあえず返信しようと携帯電話に親指をかけた。そこで、俺は違和感を覚えた。

あいつ、俺と酒を呑んで楽しいのだろうか。

つまらないから酒を飲む。楽しいから酒を呑む。面白いから酒を呑む。つまらないの反対はなんだ。楽しい。面白い。つまる？ つまらん。

口のまわりをチョコレートまみれにして息子が騒ぎ出した。ドーナツを食べ終えたら、もうジツとはしてられないのだ。おかわりのコーヒーなど頂けるはずもなく、俺は携帯電話を閉じて、駆け出す息子を追いかけた。

休日は大抵息子と過ごす。

生き物にとって子孫を残すことが命題であるなら、息子と過ごす休日ほど有意義な時間はないはずだ。駅前広場でボールを蹴る。その二分後には、他人様のフリスビーを追いかけている。次の二分後には、電話ボックスをひたすら開け閉めし、続く二分後には、抱っこしろとせがむ。

人間にとってハッピーの追求が命題ならば、もう少し楽をさせてもらいたい。

俺の財布の中には「幸福祈願」と書かれた小さなお守りが入っている。家内安全、本願成就、商売繁盛。願いは色々あれど、全て網羅する究極のお守りは「幸福祈願」である。と、思っている。

うちの社長は、明解で、なかなかいいことを言っていた。社員もハッピー、顧客もハッピー、株主もハッピー、それが会社のあるべき姿だって。幸福祈願。それって人生と同義語ではなからうか。

気付けば腕の中で息子が眠っていた。彼女は買い物に行くと言いだし、俺は広場のベンチに腰を下ろした。

携帯電話を開いて、俺は悩んだ。メールを打つのも面倒だが、電話するのも面倒だ。悩んだあげく、「2」をプッシュしてから「通話」に指をかけた。

本当につまらなかつたのだろう。宍戸はワンコールでつながった。

「よう。息子君は元気か？」

「いい加減、名前くらい覚えろよ」

俺たちの電話はお決まりのやりとりからはじまる。そして、俺は彼女に突きつけられた驚愕の事実について意見を求めた。

「分かるなあ。お前のつまらなそうな顔を見てると、俺もまだまだだって思うしな」

「どういうことだ」

「お前のつまらない顔も、他人の役に立つってことだ」

「つまらない顔って、ちょっと違うだろ」

「しかし、そんな顔を毎日見せられる嫁さんもたまらんな」

「確かに、たまらん顔してたな」

いつでも微笑みを。

笑ってりゃいいことある。そう言われても、いいことがあってから笑うべきだろうと否定したくなる。

それでも微笑みを。

不意に、恵比寿顔の店長が浮かんだ。

「今夜、呑み行くか」

「おろ、そちらからお誘いとは珍しい」

電話を切って、インカメラを立ち上げた。つまらない顔が液晶画面に写し出される。俺はカメラに向かって笑顔の練習。口角を持ち上げた。

「ねえ」

不意に呼ばれて振り向くと、シャッター音が鳴った。続いて、二人で小さな画面を覗き込む。やっぱり彼女は笑い出した。

「面白い顔してるねえ」

笑顔には程遠い。

それでも、つまらないよりましか。

## でも、やるんだよ

カメハメ波のポーズをするとコバエが飛んだ。

頻繁にそんな真似するわけではないから、はじめは気にならなかった。それでも、少年時分に読んだ漫画の影響で、肩が凝って腕を回している時なんかには、何気なくポーズをとる。すると必ずコバエが飛ぶのだ。

どうやら突き出された俺の両手から飛び出しているようだ。

履歴書を記入しながら、特技の欄に差し掛かると、俺は考える。

コバエ出せます。

しかし、そんなことを書いたところで幾らもプラスにはならないだろう。頭がおかしいと思われ、不採用になるだけだ。

年に一回は仕事を変えている。それがフリーターの醍醐味だと思うから。お陰で、友人らしい友人はいない。バイトを辞めてから、二、三度呑みに行ったヤツもいたが、行ったところで二、三度だ。必ず音信は途絶えた。こちらから連絡してもいいが、そもそも、それほど人間関係に執着がないから、進んで面倒なことはしない。

このパン屋でバイトをはじめて半年が経つ。

パン屋の前は、ガソリンスタンドで夜勤をしていた。当時は、つき合っていた女がいたため、それなりに金が必要だったのだ。割は良かったが、昼夜逆転の生活が続き、四〇歳も近い体は悲鳴を上げた。付き合いはじめた頃はアドレナリンが放出されているお陰でなんとか持ちこたえていたが、毎週末、女に会っていると、だんだんと上の空になってくる。天気がいいほど、眠たくてしかたがない。

深夜のガソリンスタンドには碌な客がいなかった。二輪の暴走集団が、敷地内をグルグルと旋回し、ガソリンも入れずに去っていくなんてこともしばしば。それでも、彼らだってガソリンが必要で、おとなしく給油に来ることもある。

「五〇〇円分でいいですか？」

そんな可愛らしい一面も見せてくれる。

上の空の逢い引きを繰り返していたら、案の定、女にふられた。その夜を最後にバイトもクビになった。ボンヤリしていたのだろう。地元のチンピラがガソリンを入りに来た時、給油口のキャップを閉め忘れたのだ。チンピラがそれに気づいたのは翌日の昼間、俺は既に仕事を終えていた。運悪く働いていたバイト連中は酷い剣幕で罵られ、店長が間に入ってなんとか片付けた。ガソリンがこぼれて塗装が剥がれたと難癖をつけ、法外な金を持っていったそう。俺は電話でクビを告げられた。

憤りにまかせて両手を突き出せば、コバエが二匹出た。

窓を開けて外に追いやると、いくらか気分が晴れた。女と別れば、それほど金は必要なくなる。夜勤を辞めるにはいいタイミングだった。

次こそ、陽の当たる仕事をしようと選んだのが、昼間のパン屋だった。工場だろうと思えば、ホールで売り子をさせられることになり少々驚いた。

「いらっしやいませえ」

黄色い声が響き、照れ臭い反面、ガソリンスタンドとは異なる華やかなさに気をよくした。時給は安かったが、無気力なその日暮らしに支障はない。バイトの娘連中は皆若く、俺は客観的にその様子を眺めることができた。

甘辛く炒めた挽肉の入った揚げパンが有名な人気店で、休日には多くのヒトでにぎわった。奥の工場からトレーに載せられたパンが次々と運び出され、俺は工場と商品棚を何往復もしながらパンを運んでいった。具材がぎっしり詰め込まれたパンがトレーに並ぶと意外に重い。なるほど、男が雇われた理由も分かる。

「パンが通りまます」

女店長が声を上げると、目の前に道が開けた。俺は客の視線を浴びながらトレーを両

手に商品棚へ向かう。眠気と戦っていた夜のガソリンスタンドでは考えられないほど活気に満ちた店だ。

時折、仕入れた挽肉が足りなくなると、商店街の肉屋に買い出しをさせられた。無愛想な肉屋のオヤジから、こちらも無愛想に挽肉を受け取った。

ある日、バイトに入ると一人の娘が目を赤くして女店長に肩を叩かれていた。その手には、肉屋の包みが握られている。俺はとっさに無愛想な肉屋の顔が浮かんだ。

俺の娘に何をした。

その夜、俺は娘の涙を思い返し、憤りにまかせて両手を突き出した。

「四匹！」

思わず声を上げた。どうやら俺の能力は進化している。

俺は妄想を膨らませた。一体、娘に何をしたのだ。無愛想な肉屋に卑屈な笑みが浮かぶ。その腹立たしい表情を掻き消すように再び両手を突き出す。

「八匹！」

さらに妄想を膨らませる。肉屋の口からミンチ肉がポトリポトリとこぼれ落ちた。

「二匹？」

気色の悪い妄想は逆効果のようだ。

憤りを奮い起こせ。

俺は安住のパン屋に辿り着くまでの長い道のりを遡る。俺を振った女、チンピラ、数々のバイト先で出会った阿呆たち、仕舞いには、学生時分に絡まれたヤンキーやら、無理矢理給食を食わせた幼稚園の先生まで浮かぶ。

憤りが十分に漲ったところで両手を突き出すと、吹雪のようにコバエが飛び出した。

六畳一間のアパートが瞬時にコバエで満ちる。驚いたが、声を上げようにも口が開けられない。鼻の中にもコバエが飛び込んでくる。目も開けていられない。俺は崩れ落ちそうになる体を必至に前進させ、どうにか窓に手をかけた。

手探りで鍵を外し、一気に窓を引き開けた。コバエは狭苦しいアパートから闇夜に飛び出した。それは、イナゴの大移動さながら、一匹残らず消え去った。

途端に静かになった部屋の中で、心拍だけが激しく音を立てていた。秘められた能力に驚き、そして、この価値に気がついた。

俺は慌てふためく肉屋の顔を思い浮かべた。

しかし、同時に俺は腑抜けになっていた。脳味噌も胃の腑も空っぽで、やたら腹が減った。ひとまず持ち帰った売れ残りのパンに手を伸ばす。表面の砂糖をボロボロこぼしながらメロンパンを囓った。

コバエにまみれた肉屋が涙を流す。その姿がとても哀れに思えてきた。そもそも、娘の涙は本当に肉屋のせいなのか。無愛想な態度が気に入らなかつただけだろう。

俺を支えていた憤りが、コバエとともに闇夜に消えてしまったようだ。

メロンパンを囓る。

砂糖がボロボロこぼれる。

俺はもう泣きそうだ。

## せいので飛び出せ

そして、俺は今にも飛び降りようと両手を広げている。

「お、おい、君、何をする」

向かいの屋上では、頭の禿げ上がったおっさんが声をあげた。

嗚呼、なんでこんなことになっちゃったんだ。

アポイント先の総合病院に辿り着き、立体駐車場に車を進めた。金曜日にしては珍しく、一階を除いて、屋上階までに「空」が点灯している。

「運がいいね」

そう思えたのは、これが最後だった。空車サインが出ていたのにも関わらず、どの階に廻っても空きが無い。残り一台のスペースが次々と埋まっていったようだ。結局、屋上階まで上り詰め、ようやく空きスペースを確保した。セレクトレバーをリバースレンジに入れて、助手席の背もたれに手を掛ける。手際よく後方駐車することに多少の美学を感じている。

一発で駐車を済ませ、得意げにイグニッションキーを抜いた。バックミラーで前髪の分け目をチェックすると、フロントガラス越しに妙な光景が飛び込んできた。

立体駐車場の前には同じ高さの病棟が建っており、その屋上の隅で、今にも飛び降りようと両手を広げているおっさんがいたのだ。

まさかと思いつつも、俺は良いように解釈しようと脳味噌をフル回転させた。

一見おっさんに見える幸福の青い鳥。

ありえない。そもそも良いように解釈しようという試みが間違えている。それでも、せめて面倒がないように解釈したい。これからさして重要ではないが、今年の売り上げに少しでも貢献するであろう面談が控えているのだ。

足首にロープが結ばれていないだろうかと目を懲らすと、どうやらバンジージャンプではなさそうだ。パラシュートを背負っている様子もない。頭にプロペラでも無かろうかと視線を上げれば、おっさんと目が合ってしまった。その目は、何か懇願するように潤んでいた。

止めて欲しいのか？

俺は苦笑いを浮かべた。おっさんは目を反らさない。いつまで眺めていても、決して面白い顔ではない。俺は助手席に置かれた仕事鞆を引き寄せて、ドアを押し開けた。そして、足早にエレベーターホールへ向かう。何も考えるなど自分に言い聞かせ、逆三角形

のボタンへ指を伸ばした。こんな時に限ってエレベーターは一階にいる。そして、永遠のような時間をかけて屋上まで上ってきた。

ところで、営業車には、太字ゴシックで大きく「(有) 丸閥医療器」と書かれている。

嫌なことを思い出した。しかし、これから自殺しようという男に社名を見られたところでどうにもならないだろう。では、ためらったらどうなる？ 零細ながら医療を食い物にしている会社だ。人の命を見捨てて、ほとんど見込みのない商談に臨んだなんてことが広まれば、俺も会社もお終いだ。

チンと音を立ててエレベーターは到着した。途端、俺はきびすを返し、駐車場へ駆け戻った。

「ちょっと待ったあああ！」

おっさんは目を丸め、口元には小さな笑みが浮かんだ。駐車場と隣接する病棟との距離は五メートル程度。しかし、その間には一〇メートルを超える谷間がある。目の前にいるのが幸薄い女なら、俺はこのままの勢いで病棟へ飛び移ったかも知れない。しかし、そこにいるのは禿ヅラを被ったウイニー・ザ・プーのようなおっさんである。俺は急ブレーキで立ち止まった。

「死んじゃいかんだろ」

おっさんは唇を小刻みに振るわせながら黙り込んでいる。泣きそうな、笑い出しそうな、先の読めない表情だ。ひょっとして、勘違いパターン？

「ありがとよ。若いの」

おっさんはようやく口を割った。どうやら自殺に間違いないようだ。俺は不謹慎にもホッとした。

「医療従事者なモンでな。見捨てるわけにはいかないんだよ」

「そうか。見捨てるつもりかと思ったがな」

ばれてる。

「家計を削って接待しまくった。挙げ句の果てに肝硬変だとよ。これ以上、家族に迷惑を掛けられんだろう」

「ちょっと待て、俺に捨て台詞を残して飛び降りる気じゃないだろうな」

「その通りだ」

身震いがした。

「家族がいるんだな」

「あんたくらいの息子もいるよ」

「そうか。じゃあ、死ぬな」

「なんだそりゃ？」

「肝臓分けてもらえばいいでしょ。あんたに言いたいことがいっぱいあるはずだ。最低にだらしなくて、格好良いとは対極にいる親父に自殺なんてされてみる。恨み以外なにも残らんぞ」

おっさんは眉間に皺を寄せ、地面を見下ろした。

「それで結構だ」

「うわあ、ちょっと待った！」

俺は阿呆な女学生のように、両手を突き出して小刻みに振るった。



「とにかく生きるんだよ。こんな世界で生きていくって、それだけでスゲェんだって。息子は社会人か？ 自分で食い扶持稼いでんのか？」

おっさんは眉をひそめながら曖昧に頷いた。

「スゲェよ。あんたはえらい。生きにくい世の中で、よくやったじゃねえか」

「じゃあ、もういいだろう」

「違あああう！」

俺はもぎ取れるほど頭を振った。

「よし、じゃあ、俺の話をしよう。俺なんて、まず、あんたみたいに家庭を築いてくれる伴侶が見つからん。コミュニケーション能力がからっきしだから、合コン行っても、好きな食べ物なんですかあ？ なんて聞かれただけで舞い上がっちゃって、ビール煽ってから炭酸全般って答えたよ。食いもんじゃねえし、正確に言えばガスだよな」

おっさんは眉をひそめたまま顔が固まっている。

「自腹で接待しまくった？ 随分派手にやらかしてんじゃねえかよ。面白そうじゃねえかよ。俺なんか、」

俺は言葉を詰まらせた。なんで、おっさん一人のために必至になって、馬鹿話をさらけ出さねばならんのだ。固まってんなよ。そんな目で見んなよ。

俺は言葉を詰まらせ、しばらく無言のまま、おっさんと対峙した。

炭酸ですか？

不意に、キョトンとして言葉を無くした彼女の顔が浮かぶ。嗚呼、昨日のあれは最悪だった。思い出ただけで顔が火照る。翌日にこれだ。ひょっとして、死ぬべきは俺の方なのではなかろうか？

俺はおっさんと視線を結んだまま、屋上の縁によじ登った。

そして、今にも飛び降りようと両手を広げている。

「お、おい、君、何をする」

向かいの屋上では、頭の禿げ上がったおっさんが声をあげた。

嗚呼、なんでこんなことになっちまったんだ。

「せいので行こうか」

そして、上空一〇メートルでハイタッチ。俺とおっさんは仲良く落ちよう。落ちるところまで落ちてゆこう。とは言っても、高々一〇メートルだ。

## 団地最後の花

まだ小六の俺でも、住所を聞けばそこが何処だかくらい見当はつく。何故なら、ここは団地だから。全部で一〇〇棟以上もある団地には、全部の建物に番号がふってあるか

ら。どの学校に通っているかだってすぐ分かる。まあ、団地には小学校が二校しかないから、すぐ分かるのも当然だけれど。中学校に至っては一校しかない。

亜細亜最大と言われたマンモス団地。完成当初は随分話題となって入居者が殺到したそう。すぐに新しい駅ができた。ショッピングセンターも、学校も建った。しかし、それは俺が生まれる何十年も前の話。今では一〇〇棟以上ある団地のうち七割以上が空き家で、平日の動物園のように活気がない。

その男は駐輪場の陰からこちらを覗いていた。

「あんた、どこの奴だ」

「一四街区だ」

一〇街区以降の奴らはエレベーター付きの高層団地に住んでいる。六街区に住む俺にとって、それはちょっとした憧れだった。なんであれ、その男は怪しい。三〇歳くらいのおっさんだ。ツヤツヤの黒髪を気色悪く撫でつけて、きっとヅラなんだろう。

「なにしてるんだよ」

「観察だよ。お前には関係ないことだ。さっさと学校へ行ってしまえ」

小学校へは街区毎の児童が集団で登校する。毎年、一番低学年の児童が住む棟の前が集合場所となり、昨年に引き続き最高学年の俺は登校班の班長だ。班長として、怪しい男を見逃すわけにはいかない。

俺がもう一步にじり寄ると、男は不意に視線を逸らせて一点に集中させた。

「嗚呼、可憐だ」

俺は視線の先に振り返る。

「おはよう」

お姉さんがほのかに甘い空気を引き連れて階段を降りてきた。そして、にこやかな顔で白い手が振られる。それは男ではなく俺たちに向けられたものだ。俺に続いて、四年のヨッチ、三年のミミ、もちろん二年のジローにも同じ笑顔が届けられた。俺はただボンヤリとその背中を見つめた。

「おい、小僧。お前はあのお嬢さんと知り合いなのか？」

小声の問いかけに無言で頷いた。すると、男は急に背後から両肩を叩いてきた。俺は思わず素頓狂な声をあげた。連鎖的にヨッチが、ミミが、ジローが声を上げる。お姉さんが振り返り、男は顔を歪めて一目散に逃げていった。

「大丈夫？」

お姉さんが駆け寄ったのはジローだった。そりゃ、そう。お姉さんはジローのお姉さんなのだから。俺はガニ股で不格好に駆けていく男の背中を見送った。

翌朝、サッカーボールを抱えてジローを迎えに行くと、やはり駐輪場の陰に一〇街区の男が潜んでいた。俺が現れるのを待っていたのか、目が合うなり駐車場から顔を覗かせた。

「おまえはお嬢さんの何を知っている？」

「そんなこと言えないよ。コジンジョーホーだからな」

俺はどこかで聞いたようなことを言い、鼻先を突き上げた。

「おまえの姉ちゃん？」

「ち、違うよ。ジローのお姉さんだ」

言うてから、慌てて口をふさいだ。

「お前、彼女のことが好きなのだろう」

「ち、違うよ。ジローのお姉さんだから。ジローはまだ二年生だから。俺は班長だから。お姉さんは昼間トーキョーの大学で勉強をしているから。夕方はアルバイトをしているから。ジローの面倒をみられないから。だから、一緒に遊んでやったりもする。だから、」

だから、お姉さんは朝一番の笑顔を俺にくれるんだ。

「俺の知っている情報とほぼ変わらん。一つ付け加えるなら、彼女は、俺が仕事場としているレストランで働いているんだ」

「あんたは、レストランで何してんのよ？」

「思想家とでも言うておこうか。まあ、そんなことはどうでもいい。とにかく、彼女は団地最後の花だ。俺には花を観察する義務がある」

俺は眉をひそめた。

「俺の観察がある限り、彼女はそこに存在する。この意味が分かるか？」

分かるわけがない。

「ところで、今日はおまえ一人なんだな」

「休みだからな」

おっさんは、その事実気づいていなかったのか、魚類のように口を開いて目を丸めた。

「そうか。どおりで定刻過ぎても彼女が現れないわけだ。俺としたことが」

「あんたみたいの、ストーカーって言うんじゃないのか？」

「まあな」

男は胸を張った。

「休日のお嬢様は何をしているのか知っているか？」

「知らないよ。バイトじゃないの」

「バイトではない。そこなんだ。俺とおまえに足りない情報はそこなんだよ」

俺とおまえ？

「コーンスープにミックスペジタブルが入ってたみてえな顔になってるぞ」

俺は意味が分からず、さらに険しい表情になる。

「ろっ君」

ジローが階段から駆け下りてきた。俺はサッカーボールを手放し、ワンバウンドさせてからインサイドで転がす。すると、ジローはダイレクトにそのボールを蹴り返してきた。俺は少し右に逸れた球に足を伸ばし、足元に引き戻す。そして、もう一度垂直に軽く蹴り上げてから、両手でキャッチした。

「大したモンだ」

男が呟いた。

ジローは男を見つけると、とっさに俺の背後に隠れ、小さな顔を覗かせた。

「そう怖い顔するなよ」

俺は傍らに視線を落としてジローに尋ねた。

「なあ、お姉ちゃんはなにしてる？」

途端、男は顔を歪めて一目散に逃げていった。遠くで男の声が響く。

「何も知りたくないんじゃないか」週明け、十街区の男は現れなかった。

いつものように通学班のみんなでジローのお姉さんを見送り、俺達も小学校へと歩き出した。

俺は男が来なかったことに少しホッと、やはり会いに行くべきだろうと決断した。

男の仕事場は、ジローに確認しておいた。正確に言えばお姉さんの仕事場を確認しただけだ。

週末、男が逃げていった後でジローは言った。

「あの人知っているよ」

三〇過ぎのおっさんと踏んでいたが、お姉さんと同級生とのことだった。中学校が同じ学区のはずだ。レストランでの仕事のことも知っていた。思想家だなんて言っていたけれど、駐車場で警備員をしているらしい。お姉さんはバイトに入る度、いつも顔を合わせるそうだ。

放課後、俺はレストランへ向かった。団地のはずれ、この辺では比較的大きな県道に面している。

暇な時間帯なのだろう。男はいい加減に誘導灯を振り回していた。そして、俺を見るなり、目を丸めて固まった。

「来る頃だと思った」

とてもそのような表情には見えなかった。ガキの行動パターンなどお見通しだとしても言いたいのだろう。

「ガキの行動パターンなどお見通しだ」

俺だってそうだ。

「思想家って、棒振ってするものなんだな」

「仮の姿だよ」

「休日のお姉さんだけど」

「何も言うな」

男は必至に誘導灯を振り回した。

「はじめ、あんたが俺に尋ねたんじゃないか」

「お前が知らないということを確認したかっただけだ。お前には見込みがある」

「なんの？ ひょっとして、ストーカー？」

「観察者と言ってもらいたい。しかし、お前は知る必要のないことを、ましてや家族に聞いてしまった。残念な行動だよ。俺はいつも考えている。彼女が休日に何をしているのか。知らぬ男との逢い引きでも構わない。いや、嘘だ。本当は俺のことを思い出して欲しい。いや、それも嘘だ」

「どうなのよ？」

駐車場には車が一台しか停まっていなかった。県道に面してはいるけれど、とても警備員の誘導が必要な駐車場には思えない。本当に雇われてやっているのだろうか。

「例えば、彼女は一人、釣りに行っている」

男は誘導灯を両手で握って、軽く両膝を折る。

「なにそれ？」

「例えばの話だ。想像してみろ。木々に囲まれた静かな湖にボートを浮かべて釣り糸を垂らす彼女の姿」

何故かその光景はすぐに思い浮かべることができた。湖畔では俺と男がテントを張って双眼鏡でお姉さんを覗いている。

「何故、お前はここに来た？」

「何故って」

「本当は知らないんだろう。休日の彼女が何をしているのかなんて」

俺は曖昧に首を傾げた。

俺はただひたすらにお姉さんの笑顔が絶えないように願っている。

## はれた日は会社をやすんで

妻にも子供にも黙って休暇をとる。そして、一人の時間を満喫するのだ。随分昔から思い描いていたことをようやく実行する時が来た。その前夜、幼子を挟んで川の字になると、俺は一人、遠足を控えた少年のように眠りにつけなかった。

翌朝、彼女は寝ぼけ眼の俺を見て首を傾げた。

「お弁当いいの？」

俺は目が冴えた。早速、ばれたか。

「今日、会社なんじゃない？」

社内勤務の日は、ビジネスカジュアルと称された格好が許され、俺はチノパンにポロシャツを羽織っていた。彼女は俺の格好を見て、その日が外勤か内勤かを見きわめているようだ。

「昼は上司と食いに行く約束になってるから」

夫婦間の嘘はできるだけ避けたい。しかし、理由に上司が絡むとき、それはたまに嘘である。

寝室でまだ眠り続けている息子に小さく手を振った。

「いってらっしゃい」

彼女に見送られ、多少の罪悪感を押し殺しながら家を出る。通りへ折れるところでドアが閉まり、俺はホッと一息ついた。

いざ自由な時間ができると、何をしようか悩んでしまう。小遣い制度の身分に贅沢は

許されない。

お笑い芸人が監督した映画に、脇役でお気に入りのロックミュージシャンが登場していた。しかし、はじめてのデートで映画はないだろう。そんな感覚と同様に映画は阻まれる。

ひとまず、学生時分から何度も思い描いていたように、いつもと反対方向の列車に乗り込もう。さて、どこまで行こうか。

列車の中では、ブレザーに短パン姿の少年が、大きなランドセルを背負ってフラフラと揺られていた。ますます生きにくい世の中が待っていると思うと胸が痛む。なんで贅沢を望まなくとも、日々はこんなに大変なのだろう。苦労人はバカを見る。そこまで言い切る気はないが、かといって、苦労が美しいとは思わない。

苦労を苦労と思わないくらいに脳味噌が麻痺している。忙しさにかまけてハッピーの追求を怠る。昔から、いくらでも苦労できてしまう方なのだ。バカみたいに面白くもない学校に足を運んだ挙げ句、身につけた能力だ。働けど、働けど、確かに楽にはならないね。それでも、働いてしまう己からの脱却。

しかし、俺は既に不安を覚えている。

映画館に向かった方がよかったかも知れない。俺はせっかくの自由な一日を、どうやって潰したらいいものか悩んでいる。

フリーターの友人が面白いことを行っていた。朝八時に目が醒めると、一日があと一六時間もあることに絶望する。腕時計を見れば、ちょうど八時だ。一日がまだ一六時間もあることに、絶望とまではいかないものの、多少動揺している。

明日には会社があるさ。

そうだ。俺には会社がある。あなたは何者ですか？ 尋ねられれば躊躇なく会社員ですと答える。大丈夫だよ。一日くらいサボったって、俺は明日も会社員だ。

そう思うことで、ようやく気が楽になれた。

列車は一級河川にさしかかる。鉄橋を渡ったところには河川の名称そのままの駅がある。何の予定もない休日はやっぱり土手だろう。俺はホームに降り立ち、まず駅前のコンビニで缶ビールを購入した。

俺は、自分の親父がそうしていたように、ハンカチで缶を包んだ。日中から酒を呑むことに多少の抵抗感があったのか、親父はいつだって缶ビールを隠すようにハンカチを巻いていた。それでいて、幼い俺をチャリンコに乗せる時でも缶ビールを握っていた。今から三〇年くらい前のことだ。当時、チャリンコの飲酒運転は許されていたのだろうか。

俺は、川辺の土手に腰を下ろしてビールを煽った。一人無言で、時折、ゲップを漏らした。あっという間に飲み終え、溜息が出た。時計を見るとようやく九時だ。今から会社に向かっても一〇時半には辿り着く。我ながらバカな考えに苦笑する。

土手には誰かが遊んだ後であろう段ボールが転がっていた。俺はそいつに手を伸ばし、段ボールを尻の下に敷く。誰もいないことを確認してから、両足を持ち上げた。

俺の尻が段ボールから滑り落ち、仰向けに倒れた。

嗚呼、心から遊べていたのは、一体、いつのことだ。

大の字になって空を仰ぐ。

そこにはいつの間にやら夏雲が広がっていた。

## あえて言わないだけです

初夏。

気持ちのいい川辺を君と歩く。唇をペットボトルから離すと君は言った。

「ねえ、なんでお茶が入りましたって言うか知ってる？」

「知らない。なんで？」

「なんでって、私が聞いてるんじゃない」

教えてくれようとしたわけではないようだ。ちぐはぐな会話を重ねて三〇年以上が経つ。

「変じゃない。お茶が勝手に入るわけじゃないのに」

「謙った言い方なんじゃないの」

「ふーん。まあ、そんなことだろうと思ったけれど」

君は所詮日本人のことだからとても言いたげに、つまらなそうに頷いた。たとえ嘘でも、もう少し気の利いた理由が思い付けばよかった。

「自ら飲まれたと思うくらい、美味しいお茶だったんじゃない？」

「飲まれたくて、自ら湯呑みに入っちゃうお茶？」

「そうそう」

「ならいいね」

君は謙遜することを知らない。つまらないモノですがどうぞ。ならば要りません。大人だから、さすがにそうは言わない。けれど、君なら美味しいからどうぞと言うね。

「未来の急須なのよ」

俺は虚を突かれ、眉を持ち上げた。続いて、君は微笑む。それが君なりの冗談なのだと理解すると、極力わざとらしくならないよう笑ってみせた。君はほんの少し視線を外す。男のヒトの目尻の皺が好きなんだって。男のヒトだなんてまとめるなよ。

「毎日はこちら湯呑みへの敬意なんじゃないか？ お陰様でお茶が入りました」

君は眉を潜める。

「じゃあ、急須の立場はどうなるわけ？」

確かに。

君は自分が思っている以上に賢い。俺は君が言うほど頭はよくない。

「急須と湯呑みの距離が五メートルくらい離れているんじゃない？」

急須で水芸でもするような君の姿が思い浮かび、俺は心から笑った。

「確かに、それならお茶が入りましたあって言うだろうね」

涙を拭ってから、俺は要らぬ知識を披露した。

「マレーシアにテータリって紅茶があって、それって泡立ったミルクティーなんだ。ティーはお茶。タリは引っ張るって意味。コップを両手に持って、いっぱい腕を広げていきながら紅茶を移し替える。そうすると泡が立つんだよ。一滴もこぼさずに移し替えるのが職人技なんだけど、やり過ぎると冷めるね」

話の途中で、君は既につまらなそうな顔をしていた。

かつて単身で海外赴任していた頃に仕入れた知識だ。君にとっては子供と二人きりで大変な時だったろう。

キラキラと輝く川面を眺めながら、俺達はしばらく無言で歩いた。

沈黙を破るのはいつだって君だ。

「そろそろ、素麺とか食べたいね」

「そうね」

素麺の季節になると思い返すことがある。子供の頃から一度試してみたいと思っていたことだ。

炭酸水割りのめんつゆで素麺を食べてみたい。

近年のハイボール・ブームで、我が家には缶詰の炭酸水が常備されている。その気になればいつだってできるのだが、歳を重ねるにつれ、なかなか実行できない大人の事情がある。

「お昼は素麺でいい？」

「いいね」

「あの子、ちゃんと食べてるかしら」

食事の話になると、家を離れていった息子の話題になってしまう。

「そういえば、あいつ変なこと言ってたな」

俺は息子のせいにして長年の夢を語った。

「馬鹿な子」

だよ。俺は苦笑い。

何十年と連れ添った君と、初夏の川辺を歩く。そこには美しいモノ以外になにもない。素直に美しいと言ってしまえたら、生きることの目的に辿り着いてしまいそうだ。

君の歩く姿にはワンピースがよく似合うね。他に何も要らないね。

きっと君は、素直に喜んでしまう。

だから、あえて言わないだけです。

## モラルとゲリラ



今になって思えばすごいあだ名だ。

モラルは持田。小四の春、俺たちのクラスにやってきた。当時、パンクロックバンドが散らかした爆音たちの中から「モラル」という言葉を知った。誰かのモラルはいらない。モラル＝道徳と言う認識はなかった。あったとしても、俺たちにとって道徳とは単に授業の一科目でしかなかった。道徳＝国語だ。それでも、なんとなくは理解はしていたのだろう。おかつ頭で白い顔をした持田は、どこことなくモラルだった。

ゲリラは小菅。腹が弱かった。当時、ディフォルメ化されたゴジラのキャラクターが流行っていて、誰もが通学帽に缶バッジを付けていた。ゴジラ、ミニラ、モスラ、ゲリラ。腹を除けば万能な男だった。ドッジボールをする時も、ゲリラさえいれば負ける気がしなかった。勉強もできた。そして、引越してきたばかりのモラルを滅多打ちにした。

誰かが意地の悪い入れ知恵をしたのだ。

「ゲリラ君、よろしく」

誰だって、本人を目の前にそんな呼び方はしない。彼は本当に万能だったから、クラスみんなに無視させようなんてまどろっこしいことはしない。失態を犯した相手を教室の隅に追い込み、徹底的に拳で殴打する。そして、掃除箱に叩き込む。

「俺がいいと言うまで出てくるな」

五限目は理科だった。みんなは理科室へ移動し、モラル一人が残された。

授業が終わってゲリラが掃除箱を開けると、顔中痣だらけになったモラルがバケツに座っていた。

「もういいぞ」

ゲリラが手を差し伸べる。しかし、モラルはその手を握ることはなかった。

「閉めろ。俺はしばらくここにいる」

俺たち傍観者は啞然とした。ゲリラはモラルの言う通り、再び掃除箱を閉めてロックをかけた。そして、俺たちに振り返る。

「ところで、こいつに妙なことを吹き込んだのは誰なんだ？」

俺ではない。だけど、犯人は俺たちの一人だった。

「こいつがイカレたら、そいつのせいだぞ」

ゲリラは溜息をついた。問い詰めはしない。コソコソ隠れてくだらないことをする男に興味がない。

「嗚呼、腹が痛い」

ゲリラは便所に消えた。

帰りのホームルーム、担任の山代は長身を活かしてクラス中を見回す。もちろん、空席があることに気がついた。

「持田はどうした？ 小菅もないじゃないか」

ゲリラはトイレに行ったきり戻ってこなかった。

誰もが二人の行方を知っている。モラルに至ってはみんなの背後に潜んでいるのだから。それでも、みんな黙り込んでいた。山代はゲリラがモラルを連れ出したとでも思っていただろう。

ゲリラが怖いから黙り込む。それだけではない。悪いのは自分たちだってことくらい分かっている。だから、進んで手を挙げてゲリラが便所にいると言えなかった。俺を含

めた俺たちだ。確か、言い出しっぺはドンちゃんだ。小菅のあだ名はゲリラだと笑った。俺だって一度くらいは笑って呟いたろう。

山代は一人一人撫でるように視線を巡らせた。モラルは物音一つたてない。最後に大きな溜息を漏らし、クラスの解散が告げられた。

二人を捜しに山代が出ていったところで、俺たちは掃除箱のロックを外した。モラルは変わらずバケツに座っていた。痣だらけの赤黒い顔で俺たちを見回す。そして、立ち上がる。俺たちは一歩後ずさった。

俺は視線でドンちゃんを探した。その間にモラルはランドセルを拾い上げ、さっさと教室を後にした。

「ドンちゃん、謝って来いよ」

誰かが言った。

「え、俺かよ」

ドンちゃんがケリをつければいい。そう思ったのは俺だけじゃない。

「持田あ」

廊下で山代の声が響いた。続いて、足音が走り出す。廊下を覗けば、山代を振り切つて昇降口に駆けて行くモラルの姿があった。

それから、二人は親友になった。

モラルとゲリラのことだ。ゲリラはいつだってクラスを中心だったけれど、その万能さから誰もが距離を置いていた。陰ではゲリラと呼ばれ、放課後になると決まって一人で帰っていった。

そんな彼に命令口調でモノを言うヤツが現れたのだ。

閉めろ。俺はしばらくここにいる。

俺たちはいつかモラルの指揮下でゲリラの滅多打ちにあうのだろう。しばらくそんな強迫観念にかられていた。しかし、時が経つにつれ、そんなことはないを知る。プールがはじまり、もうすぐ夏休みだ。いつまでも怯えているほど暇ではない。

「モラルは二五メートル泳げんの？」

「まだ今年は泳いでいない」

やっぱりモラルはちょっと変だ。どうしても、俺たちと会話が噛み合わない。

「去年はどうだったんだよ」

「あれは何メートルだったろうか」

ドンちゃんは口元を歪め、眉間に皺を寄せる。ゲリラは子供を見るような優しい目で微笑んでいた。

ゲリラは少し口数が減ったように思えた。それでも活躍の場に立てば圧倒的だ。飛び込み台を蹴ると、水しぶきを立てずに頭からプールへ吸い込まれていく。そして、アツと言う間に二五メートルを泳ぎ切った。

案の定、モラルは二五メートルを泳げなかった。

放課後になると、二人そろって昇降口を後にする。そして、ゲリラはモラルの一歩後ろを歩きだした。

正直、俺の不安はまだ消えない。

## 宍戸グレイト・ディクテーター

会社を後にして昨日のメールを再送する。幼い息子はもう眠りについたようだ。すぐに細君から電話が返ってきた。

「さっき、宍戸君から電話があったよ」

「そう。なんだって？」

「寝かしつけてる最中だったから出られなかったんだけど。ドラえもん鳴りっぱなしで、あの子目を覚ましちゃって大変だったんだから」

「電話してやってよ」

彼女は気のない返事をした。俺はもう駅に着くからと言って電話を切った。

前の夜は割と深酒をして、いまだに胸がムカムカしていた。宍戸と月例の呑み会だ。

「でも、マジで婆さんの肯定っぷりは半端ないぞ」

俺は何度も聞いた話に耳を傾けていた。

記憶は薄れていく。置き換えられてゆく。だから、本当に大切なものは何度も繰り返さないといけないと、宍戸は言う。確かにそうかもしれない。俺は彼女に呆れられるほど記憶力が悪い。思い出も、記念日も、俺こそ繰り返し口にしたほうが良さそうだ。

反復される宍戸の大切な記憶は、俺の脳味噌にも確実にインプットされている。

冷めて牛脂の固まった牛筋煮込みをつまみ、俺は頷いた。

「なんか言えよ」

最も苦手とする注文だ。

「お前は考えている振りをしてるだけで、実は何も考えていない」

明日も会社だと思うと、早く切り上げて眠りたい時間だった。

「今度、嫁さんを連れてこい」

「子供がいるから無理だ」

「息子君は何時に寝る？」

「いい加減に名前くらい覚えろよ」

「寝た頃に、酒を持って訪ねよう」

「やめてくれ」

「では、手ぶらで行こうか？」

「来ないでくれということだ」

「随分ハッキリ言うね。大したモンだ。では、電話にしよう」

宍戸は本当に電話をしたようだ。

会社から帰宅すると、彼女は頬杖をついてテレビを眺めていた。何を見ているのかと思えば、息子のために撮り溜めたドラえもんだ。随分と様相が変わり、はじめはガッカリさせられたが、子供が楽しんで見ているものだから、すぐに馴れてしまった。

「オープニングの歌がいいのよね」

最近では携帯電話の着信音もドラえもんだ。

シャワーを浴びて一息。ダイニングテーブルに着いてランチョンマットを広げると、食事が運ばれてくる。

「宍戸君に電話したよ」

「したんだ」

「あなたが言ったんじゃない」

「そうね。婆さんの話してたろ」

彼女は首をかしげた。

「朝靄に沈む街の話か？」

彼女は首はさらに傾く。それ以外に宍戸が喋ることと言えば、ご長寿世界一の夢くらいだ。

「沈むといえば、いずれ世界が海に沈むなんて言ってたわね」

「世界い？」

「自分たちの世代が人類の絶滅に立ち会えるんじゃないかって」

俺にはしない類の話だ。廻りだした破滅への歯車をくい止めるには絶対的な一声が必要で、その方法の一つがロックンロールなんだ。だから、俺たちはバンドを組んだ。

「そうだったの？」

「初耳です。随分とポップな話だねえ。そんな時、君はなんて言うわけ？」

「独裁者の村を思い出したわ」

「なにそれ？」

「テレビで見たのよ。村全体が福利厚生バッチリな会社みたいなの。ワンマン社長が家まで与えて社員を支えてるの。そこまでされたら従っちゃうわよね。たとえあなたが亭主関白でも幸せならいいじゃない」

「俺、亭主関白か？」

「たとえばの話」

「あいつ、なんだって？」

「随分細かく知りたいのね。私の携帯電話とか覗いてるでしょ」

「するかっ」

こんな時は、ハッキリ否定しておいたほうがいい。

「なぜかお礼言われて、さっさと電話切られちゃったわよ」

「あいつ世界でも救う気か？」

俺は真っ赤なミニトマトをつまみ上げて口に放り込んだ。柔らかい皮が破れて果肉が弾けた。

食事を終え、茶を啜りながら宍戸にメールを打った。

独裁者になるんだって？

すぐに返信が返ってきた。

亭主関白よりいいだろ。

俺は茶を吹きそうになる。そんなことまで実際に話していたのか。眉間に皺を寄せて、台所に立つ彼女を睨む。彼女は首を傾げて全く関係のないことを呟いた。

「夏場の皿洗いは好きよ」

穴戸の夢は相変わらずご長寿世界一。

あいつが夢を見続けている限り、人類の絶滅はないのだろう。

## 過去の少年

缶ビールを片手に夜の公園で遊ぶ。滑り台に尻を付いたら接着面積が大きいので滑りが悪い。ブランコを漕げばすぐに気分が悪くなる。実際のところ遊べていない。

ブランコを漕ぐのを止め、缶ビールをもう一口。今頃、あいつは胸を高ぶらせてスイッチに指を伸ばしていることだろう。今頃というのは語弊がある。あいつというのもおかしい表現か。

やがて隣のブランコからぼんやりと光が溢れ、一人の少年が現れた。

「よう」

俺は呟いた。

「あんた誰だ？」

派手な登場しておいて、あいつのほうが驚いた。

「未来のお前だよ」

少年は露骨に嫌そうな表情を浮かべた。ちょうど三〇年前に俺が見せた顔はこんな感じだったわけだ。我ながらいけ好かない餓鬼だね。つまらなそうに辺りを眺めている。大して変わっていないじゃないか。そんな感想を持ったろう。

俺はかつてタイムマシンを作ってしまった。一〇分ばかりの時間旅行をして現在に戻ったのだけれど、俺の話を利用する者はいなかった。あまりにつまらなかつたものだから、それきりタイムマシンを使うことはなかった。つまらなかつたのは、周囲の反応だけではない。時間旅行そのものが大して面白くなかつたのだ。やがて記憶は風化し、あれが現実だったか夢だったかすらよく分からなくなつた。

最近になって、久しぶりに姉貴から電話があつた。

「明日、あんたがやって来るんじゃないの？」

はじめは何を言ってるのか分からなかつた。しかし、姉貴がタイムマシンという言葉の口にした途端、記憶がフラッシュバックした。彼女は俺の話の信じていたのだ。

「だって、本当だったらウケるじゃない」

信じていたわけではないようだ。

「よく覚えてたね」

「家に帰ったら、あんたの日記を見つけたのよ」

「勝手に読むなよ」

「別にいいじゃない。字が下手で読む方も大変だったんだから」

「悪かったね」

そして、俺は呼び覚まされた記憶をたどり、夜の公園に足を運んだのだ。実家から一〇〇キロ以上も離れた手近な公園だが、少年の俺が現れることは間違いなかった。何と言ったって三〇年前に会っているのだから。

「未来か」

少年は住宅の前に止められた車を眺めて呟いた。タイヤが付いていたことにはがっかりしたのだろう。

「二一世紀にようこそ」

俺は笑ってみせた。

「あんた、俺が来ることが分かってたみたいだな」

「三〇年前、俺もここに来たからな」

次第に記憶が鮮やかになり、多少の感動がこみ上げてきた。あの時、俺が作ったものは確かにタイムマシンだったのだ。

「ここ、本当に二一世紀？」

「一つ未来を見せてやろう」

俺は携帯電話を取り出した。

「これは電話だ」

少年の目が大きく見開かれる。続いて、ワンセグにつなぐ。

「なんとテレビにもなる」

「おおっ」

少年は歓声をあげて手を伸ばした。あの頃の俺にとって、小さいテレビは分かりやすい未来だった。やがてテレビは腕時計型になると思っていたが、そこまで小さいとさすがに見づらいか。

俺が見せることのできる未来はこれくらいだった。あとは、腹の突き出た未来の君。俺は腹を叩く。少年はあらためて眉をひそめた。

「二一世紀なんてこんなモンだよ」

俺はブランコを漕ぎはじめた。

「でも、二一世紀って本当に来るんだ」

少年も俺と互い違いに揺れはじめた。

一九九九年、恐怖の大王が降ってくる。あの頃の俺たちはそんなことを本気で心配していた。その反面、タイヤのない車が空を飛び、妙に丸み帯びたビルディングが立ち並ぶ未来の街並みを想像した。今の子供たちに未来を描かせると、緑豊かな世界を想像するのだそうだ。地球を汚した大人の責任だろう。気づけば俺もおっさんだ。お前の所為だと言われても仕方がない。

あと三分もすれば、少年の体は再びぼんやりとした光に包まれ、三〇年前へ帰ってゆ

く。

「ここは田舎だからな。都会に行ったら本当はもっとすごいぞ」

あの時、おっさんは少年の俺に出鱈目な二一世紀を語ってみせた。それが嘘だってことはすぐに分かった。なぜなら、俺の頭の中にある未来そのままだったから。それでも、俺は語りはじめる。ブランコで気分が悪くなるのを必至で堪え、少年が消えてしまうまで出鱈目な未来を語り続けた。

## 世界はこんなにも

親不知にできた虫歯を抜いて一週間が経つ。

奥歯の奥にポツカリ空いた空間に違和感を覚えつつ、世界はこんなにも痛くないものなもかと感動する。痛みを耐え、冷や汗を流しながら営業をこなしていた日々は一体なんだったのであろう。

半月前、研修期間を終えた新人二名が俺たちの事業所に配属された。一人は綺麗な歯並びを見せながら笑う女だった。彼女を見た途端、休日を割いてでも虫歯は治すべきだという考えに至ったのだ。密かに彼女をトゥースと呼んでいる。彼女には一言礼を言わなくてはならないだろう。

トゥースと同期入社した男は、洞窟で育ったモヤシのような男だ。どうにも青年という言葉が似合わない。真夏の炎天下に外回りをさせれば、すぐに萎れてしまいそうだ。それでいて、歓迎会ではやたら酒を飲む。一〇年後、酒で人生を駄目にしてることは間違いないだろう。密かに彼をドークツと呼んでいる。

それにしても、痛みのない日々というのは素晴らしい。左肩に感じる多少のコリを除けば俺の体は万全だった。何をしたらうまくいきそうな万能感を覚える。たとえ、うまくいかないことがあったとしても、最大限のことはやったのだと自分を納得させることができるだろう。何故おまえはもっと早く治さなかったのか。治療以前の自分が愚かな他人のように思えた。

俺はいつもより一本早い電車で出勤し、トゥースに右手を挙げながら頬笑みを送った。

「おはようございます」

相変わらず歯切れのいい挨拶が返ってくる。ドークツはゴニョゴニョと口を動かしながら頭を下げた。俺にもそんな時期があった。悪い気はしない。なにより今の俺には世界が以前より一〇〇ワットほど明るく見えていたから、細かいことを気にする必要はなかった。

デスクにつくと課長がやってきた。

「今日、新人と外廻ってくれないか？」

案の定で期待はずれ、ドークツの面倒をみて欲しいという上司命令だった。

「あいつとは馬が合うんじゃないか？ なんだか入社当時のお前に似ているよ」

俺は曖昧に微笑んで、業務を引き受けた。

一件の納品と二軒の営業をまわった後、先送りにしていたクレーム処理へ向かう。助手席に乗ったドークツは黙ったまま、自ら口を割ろうとはしない。納品と営業の合間、俺はハンドルを握りながら尋ねた。

「どうだった？ 何か質問あるか？」

「まあ、そうッスね。大丈夫そうッス」

いい加減な返答に呆れる。なんだか入社当時のお前に似ているよ。不意に課長の言葉が思い出されて苦笑する。どうだった？ なんて、関心ないのに無理すんなよ。ドークツの心の声が聞こえた気がした。ああ、その通りだよ。

続く、クレーム処理は散々だった。対応マニュアルに従い、はじめにクライアントの気持ちを受け止める。要するに平謝り。ドークツはそんな俺をヘラヘラと傍観した。クライアントはチラチラとドークツを横目にしながら怒りをたぎらせる。これでは、いつまで経っても鎮火しやしない。挙げ句の果てに、俺たちは出入り禁止を告げられた。二度とここに足を運ぶ必要が無くなったのだ。

頬を押さえても奥歯は痛くなかった。己の健康体が厭わしい。会社に戻る気がせず、駅前のコインパークに車を止めた。

「おまえ、結構呑めるんだろう。奢るからちょっと付き合え」

まだ日の沈まない夏の夕刻、一〇〇〇円で酔えることをウリにした居酒屋に向かう。ひとまずビールを呷り、続いて、次々と甲類焼酎のロックを頼んだ。

「斧ってどこで買えるんスカね？」

ようやくドークツが口を割ったかと思えば、早速、理解を超えた。

「何考えてんだ、ドークツ」

「洞窟？」

「ホームセンターで売ってんじゃないの？」

「ヤフオクにあったんスけど、なんかイメージ違うんスよね」

「なんで、斧なんかいるんだよ」

「彼女がスイカ好きだから、スイカ割りしようって言ったんスよ」

なにより、ドークツに彼女がいることに驚いた。

「で？」

俺は怒りを押し殺す。

「棒の先に斧でもついてればやってもいいと言われたんスよ」

「なんだそりゃ」

「スイカ好きは、スイカ割りが嫌いなんスね。グチャグチャになるじゃないッスか」

「やんなきゃいいんじゃないの」

「夏ッスよ。彼女とスイカ割りやりたいんスよ。だから、スイカがサクッと一撃でいけるくらいの斧が必要なんス」



スッス、スッス、腹立たしい。頬を押さえるが奥歯は痛くない。  
「ところで、さっきの洞窟ってなんスか？」  
「なんスカね」

俺は肝臓を痛めつけるように安酒を呷り続けた。

## 少年の子守唄 おっさんのブルーズ

ぽっこり膨らんだ子供の腹を撫でながらは君は歌う。力無い歌声がこぼれ落ち、暗闇に溶けてゆく。隣で耳を澄ませている俺はいつだって先に眠ってしまう。

誰もが聞き惚れてしまうような歌声ではない。普段から歌を口ずさむような君でもない。それでいい。楽器は要らない。マイクも要らない。囁くというのも違う。とにかく子守歌にうってつけな歌声なのだ。

おやすみなさい 少年は  
いつの日にもどんなところでも  
風のように 川のように 土を撫でてゆく

遊び疲れた 少年は  
樹洞の中の子守歌を聞きながら  
時を超えて 空を舞って 夢を紡いでゆく

明日はどこへ行こう 君となにをしよう  
おやすみなさい おやすみなさい

俺の作った子守歌。

まだ子供にも聞かせたことがない。いつだって先に眠ってしまうから披露する間がない。

話は変わるが、この辺を担当する宅急便屋はもの凄く愛想がない。俺も他人のことを言えたモンじゃないが、仕事であれば徹底している。それでもモノは届く。そろそろ届くだろうと思えば、その日の午前中に届いた。だから、文句のつけようがない。

ある休日、俺はオンラインの中古レコードショップで購入した商品を待っていた。今日かと思えば今日届く。ドアベルが鳴り響き、俺は印鑑片手にスリッパを鳴らした。後ろにおまけも付いてきた。

ドアを開ければ、案の定、無愛想なおっさん。

「丸罰急便で」

す。までは聞き取れない。既に切り離された伝票を箱の上に載せて、早くしろと印鑑をせがむ。すると、俺の足元から幼子が満面の笑みを覗かせた。

「コニチワっ」

「こんにちは」

俺は危うく印鑑を落としそうになった。子供の挨拶以上に、おっさんに驚いた。このおっさん、挨拶できるんだ。笑顔の一つも浮かべない。照れるでもない。マニュアル通りの対応だ。でも、するんだ。

俺は無傷で届けられたそのレコードに針を落とす。本当はCDだけど。日本のブルーズ「嫌になった」に耳を傾けながら、相変わらずの無表情でアクセルを踏み込むおっさんを思い浮かべた。しゃがれ声に顔面は強ばり、眉間に皺が寄る。おっさんはタバコをくゆらす。そして、満面の笑みを見せた三歳児を思い返す。

「コニチワっじゃねえよ。フィリピーナかってえの」

「何か言った？」

俺は首を振る。彼女は首を伸ばして、CDジャケットを確認した。

「なんか頭痛いわ」

そう言い残して、トイレに消えた。一体、どんな体の構造をしているのか。

俺はメッセージを理解し、CDを停めた。音楽の嗜好はまるで合わない。確かに休日の昼間から流す

BGMではい。みんな寝静まった後に、夜な夜な聞くとしよう。

今夜は、彼女の子守歌に耳を傾けてはいけない。

俺の歌でも披露しようか。

## 迷子になった覚えはない

「あんたはいつも肝心なところで狡いんだよ」

まさかにそんなことを言われるとは思わなかった。弟分だと可愛がっていたのに、あいつは俺のことを何とも思っちゃいなかったのだ。何も思っていないわけではないか。狡いと思っていたのだから。

「だからなんだ」

開き直って胸を反らす。俺のことは俺が一番よく知っている。狡い男だなんて、言われなくとも分かっているのだよ。ただし、そう易々と認めるわけにもいかないね。

俺はあいつに背中を向けて、女の店に足を運んだ。

「何、しょぼくれた顔してんのよ。そんな景気の悪い顔されたら営業妨害じゃない。これ飲んだら出てってよね」

女はそう言って、頼んでもいない珈琲を差し出した。サービスというわけではない。一杯でラーメンと替え玉が喰えるほどの代物だ。

「客が一人もないのに、どうやって妨害すりゃいいんだ」

俺はカウンターに腰を下ろし、カップに口をつけた。

「あの子は？」

「巣立ちの季節だ」

「捨てられたのね」

「あいつも、もう立派な大人だ」

「なんて言われたの？」

「俺がしてやれることなんて、もう何も無い」

「駄目な男？ 気障な男？ 狡い男？ 中身のない男？ つまらない男？ マゾヒスト？」

マゾヒストは性質であって、悪いことではない。

「臭い男？」

「狡い男だ」

女の笑いが弾けた。

「あはは、金借りっぱなし？ 見栄張りっぱなし？ 嘘つきっぱなし？ 逃げっぱなし？」

「あんなガキに金なんか借りとらん」

それだけは胸を張って否定できる。

俺はいつだってこの女にボロクソ言われて、己を知る。マゾヒストは性質であって、悪いことではないが、別に俺はマゾヒストではない。

「あんたに何を期待したのかね？」

「知るか」

「ちゃんと聞きなさいよ。そこからして狡いのよ」

「どうせ馬鹿だからね」

「あ、僻んだ。狡いぞ」

「コーヒー粉っぽいぞ」

「狡い狡い」

「だからなんだ」

開き直って胸を反らす。俺のことは俺が一番よく知っている。狡い男だなんて、言われなくとも分かっているんだよ。ただね、そう易々と認めるわけにも。

俺は溜息とともに千円札をカウンターに置いた。

「おつりは？」

「いるよ！」

俺は渋々差し出された二〇〇円をうけとって、女に背中を向けた。

さて、どこへ行こう。

その前に、一つ確認しておきたいことがある。

「なあ、ちょっといいか？」

「なによ？」

「俺、臭いのか？」

女の笑いが弾けた。

## 宍戸オール・アポロジーズ

誰にでも平等に陽は昇るものだが、昼間から呑み屋の店主に出会うのは、何だか奇妙な感じだ。

「宍戸くん、風邪ひいたみたいだねえ」

大抵のことはのど飴で治ると言っていたあいつが倒れたらしい。

店主はいつもの恵比寿顔で、眉毛だけを器用にハの字にする。本当に気のいい男だ。

「あいつが風邪ね」

「知らなかったの？」

店主はつぶらな瞳を見開いた。

呑み屋に行くときは決まって宍戸と一緒にだった。だから、いつでも一緒だと思っていたのだろう。電話やメールのやりとりはあっても、月に一度の飲み会以外に会うことはない。とは言え、所帯を構える男が、仕事以外の相手と毎月飲みに行くというのは、結構いい頻度かもしれない。

「どこで知ったんスか？」

「彼、たまに女の子を連れてくるんだけど、昨日はその子が一人だったんだよね」

驚いた。昔の女をもう一度口説いたと言っていたが、どうやらうまくいったらしい（詳細は、既刊の「宍戸スイート・シーズン」をご参照いただきたい）。あいつのボロアパートに女物の靴が並んでいる。そんな様子を想像し、我ながら古風な男だと思う。

店主に頭を下げ、細君から借りてきた電動自転車に跨った。力任せにペダルを踏み込むと、チェーンが外れたように抵抗がない。いつまで経っても漕ぎ出しの力加減に悩まされる。

宍戸の様に風邪をひいたわけではないが、薬局へ向かうところだった。リップクリームを一本買いに行くのだ。いつも仕事帰りに立ち寄ろうと思うが、満員電車で揉まれているうちに忘れてしまう。連休の合間に、はたと思い出し、暇なうちに買いに行くことにした。

「袋いいです」

購入するなりパッケージをむしり取り、ゴミ箱に放り込んで店を後にした。

店の前で一塗り、再びぎこちなくペダルを踏み込んだ。出だしはふらつけど、スピード

に乗ると気分がいい。このまま宍戸のアパートまで見舞いにでも行こうか。しかし、すぐに思い留まる。なぜなら、薄汚い玄関には女物の靴が並んでいるはずだから。それはちょっと草臥れた真っ赤なスニーカー。

「私、パンクなんです」

彼女はそう言い残し、宍戸のバイト先を去っていった。そんなところにあいつは惚れたそうだ（クドいようだが、詳細は、既刊の「宍戸スイート・シーズン」をご参照いただきたい）。

俺は自転車を旋回させ、自宅へ戻っていった。

その夜、宍戸から電話が鳴った。

「おまえは薄情なヤツだよなあ。俺が寝込んでいるのを知りながら一報も寄越さんのか」

「今日知ったばかりだが」

「ならば、すぐに電話したらいいだろう」

彼女が看病に来ていると思ったのだ。そう言おうとしたが、果たして彼女がいなくて知れば電話をしたろうか。

「今、恵比寿の飲み屋か？」

「そうだ」

「すっかりいいのか？」

「昨日が山だった。朝には随分スッキリして、数年ぶりに朝風呂入ったよ。あまりに気分が良くて、詩を詠んだぞ」

それは、『朝風呂大好き重三郎の唄』という、ふざけた散文詩だった。呑み屋に行っても酒を飲まない宍戸の横には、彼女がいるのだろうか。

宍戸が彼女の存在を口にするようになった頃、話題に出てきても、なかなか俺に会わせようとしなかった。出鱈目なのではないかと訝ったが、ある日、駅前で寄り添う二人を目撃した。その後、彼女は近所のマンションに住んでいると知り、やがて別れを知った。

宍戸は、彼女のマンションから望める朝靄に包まれた街が好きだった。彼女にまったく共感されず、気持ちが醒めたそうだが、あれから理解は得られたのだろうか。

好き好き朝風呂好き好きスー

宍戸が奇妙に声を裏返す。嗚呼、そうか。あいつは俺に駄作を披露している最中だった。素面でこんなことをするのだから大したモンだ。

どこか既視感を覚えたのは、学生時代の一齣と重なったからだ。俺たちが大学でバンドを組んでいた頃、あいつはワンフレーズ思いつく度、俺のアパートに電話した。下宿していたアパートには親に持たされた置き電話があったのだ。誰も携帯電話に連絡を寄越すから、大抵は留守番電話になっていた。つまり、ほとんど宍戸の鼻歌録音器だったのだ。

鼻歌が録音された夜、俺はそのフレーズを膨らませて曲を完成させる。翌日、大学内

の練習スタジオに籠もって、気のいい後輩にドラムを叩かせた。俺はその正確なリズムの中でいい加減にギターを引っかき回す。宍戸がさらにノイズを重ね、言葉を散らかせた。

好き好き大好き好き好きスー

言葉の安易さは過去も現在も変わっていない。

「奇を衒うな」

当時、好んで宍戸をそう揶揄した。

「裏の裏だ」

あいつは答えた。

いつだって宍戸は本気を出さない。あいつの本気を俺は知らない。そう思う。

電話越しに女の声が聞こえた気がした。

俺はしばらく呑み屋に誘われないのだろう。

どっちが薄情だよ。

## ありがとサンキューベリマッチ

俺にはきっと自分でも気づいていない壮絶な力があって、そいつで世界を救っちゃったりするのだろう。

だから、こんなことされたって屁とも思わない。欽太郎も俺の力に気付いているのではないだろうか。意味もなくこんな仕打ちはしないだろう。出る杭は打たれる。打ちたいだけ打てばいい。反対側から突き出てやる。

答えはいつだって俺自身に刻まれている。遺伝子というのがどうもそうらしい。人間は、遺伝子半分、環境半分で作られると聞いたことがあるよ。

遺伝子はどうだ。俺たちには人類史によって篩をかけられた最新型のそれが組み込まれている。専門ママンとサラリマンのハイブリット。ママの餃子はどこの店より美味しい。パパはいくらだってアルコールが摂取できる。全DNAのうち遺伝子として活用されるのは三分の一程度だという。常人であればね。

環境はどうだ。欽太郎が俺に与える最低な環境は、封印された三分の二を解き放つ。四〇〇万年の間、一度も作動することの無かった遺伝子が活性化され、俺は壮絶な俺を手に入れる。

まずは閉め出された屋上からどうやって脱出するか。それが急務だ。

「ねえ、もしかして鍵かけられた？」

塔屋に向かって思案する俺の背後から声がした。振り返れば、セーラー服姿の見覚えのない女子。学年が違うのだろうか。

「君は？」

「まず、私の質問に答えなさいよ」

「屋上の鍵なんて先生じゃないと掛けられないよ。箒で叩かれただけだ」

「同じじゃない」

「で、君は？ 質問に答えたろう」

彼女は転校生だった。

お父さんが転勤族で、何度も転校を繰り返しているそう。登校初日には決まって学校の屋上から自分の家を確認する。はじめて転校した時、学校から家に帰れず大泣きをしたのだ。当時は、まだ小学生の低学年だったから仕方ない。でも、もう中学生だ。そんなことはないだろう。それでも、登校初日には屋上から自分の家を探した。小さく見える街を眺めること自体が好きなのだ。模型電車のジオラマがあれば、男子に混じっていつまでも眺めてしまう。都心に出れば必ず高層ビルに登った。人々が虫みたいに小さくなって動き回る姿は、見ていてゾクゾクする。

彼女は随分と自分のことを話し続けた。

「テンキンゾク？」

「パパが、そういうタイプのサラリーマンなのよ」

「何だか特別そうなサラリーマンだね」

「え、何？」

俺は横に首を振る。

「で、どうやってここから出るわけ？」

「手っ取り早いのはここから飛び降りることだろうな。あいつは、俺にそんな度胸はないと思っているんだ」

俺は屋上から真っ直ぐ水平方向を指さした。

「あいつって誰よ？」

「欽太郎。クラスを仕切っている単細胞だ」

「ふうん。あんたが飛び降りて、門を開けに来てくれるわけ？」

「それでもいい。なんなら一緒に飛ぶかい？」

「嫌よ。そんなことしたら確実に死ぬじゃない。なんで、転校早々わけの分からない男子と死ななきゃなんないわけ？」

俺にはちょっとした能力が備わっている。そうだと思ったことは大抵当たる。

「こんなところでは死なないよ。俺はそう予知してる」

彼女は首を傾げた。

「そろそろ、あいつを見返してやる必要があるんだよ」

「え、何？」

「あいつに気付かせるんだよ」

「あんた、さっきから声が小さいのよ。声が小さい男子って大抵駄目なのが多いわよね」

彼女は吐き捨て、柵の方へと歩いていった。そっちらからは校庭が見下ろせる。運動会に向けて大縄跳びの練習に励む者。鉄棒に寄りかかって空を見上げる者。毎日飽きもせずサッカーボールを追いかける者。その中に欽太郎もいるはずだ。

彼女は自分の両腕を抱きしめるような仕草をした。ゾクゾクしているのだろうか。

「変なヤツ」

俺は小さく呟いて、彼女の脇に歩み寄った。

「言っておくが、俺は駄目なのじゃないぞ」

俺はひらりと柵を乗り越え、せり出したコンクリートの際に立つ。そして、飛び込み選手さながら両手を広げてみせた。

突然、彼女はヒトのものとは思えないほど力強い声を響かせた。

「欽太郎おおっ！ すぐに屋上のドアを開けなさああいっ！」

俺はその勢いに吹き飛ばされそうになり、思わずしゃがみ込んで柵にしがみついた。校庭にいる誰もが一斉に屋上を見上げる。俺は顔が熱くなった。

彼女は再び自分の両腕を抱きしめ、足踏みしながら体を竦める。そして、キラキラした目で俺を見下ろた。

「ねっ、ゾクゾクするでしょう」

彼女は柵の上から手を差し伸べた。俺は無意識にそれをとる。すると、彼女は柵に足をかけて力一杯に引っ張り上げた。俺は慌てて立ち上がり、もう一方の手を柵にかけてそれを乗り越えた。

「あつぶねえな」

よろめきながら着地した。

「あつぶないのはあんたでしょ。馬鹿じゃないの。確実に死ぬって言ったじゃない」

俺は鼻をならした。

「俺は死なん」

「何言ってるの？ それって私のお陰でしょ。恩人にお礼でもしたら？」

キラキラした目が急に陰る。苦笑いを浮かべると、彼女の表情はさらに曇った。

「分かったよ」

「え、何？」

「ありがと」

「声が小さい！」

おまえの耳が遠いんだよ。そう言いかけたところで、塔屋のドアがガタガタと音を立てた。

「誰か来た」

彼女の目が再び煌めいた。

「あんた予知能力あるんでしょ。誰だと思う？」

「欽太郎だろ」

「先生じゃない？」

「あいつに決まってるだろ。いいか、これから起こることを教えてやる。飛び込んできた欽太郎は、俺にぶっ飛ばされて泣きを見ることになるんだ」

俺は拳を握って命一杯の強がりを吐き捨てた。そして、大声をあげながら塔屋の方へ



と駆け出した。



奥付

## 奥付

Puzzle 文集 2

<https://puboo.jp/book/31037>

著者 : puzzle

著者プロフィール : <https://puboo.jp/users/puzzle/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/31037>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31037>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <https://puboo.jp/> )

運営会社 : 株式会社 paperboy&co.



---

Puzzle文集2

---

著 puzzle

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---